

## 2008年度 Ⅲ.インドと日本の仏教儀礼の比較研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/24032">http://hdl.handle.net/2297/24032</a>

## III. インドと日本の仏教儀礼の比較研究

## 1. 儀礼研究の魅力：「大地にひそむ龍」をてがかりに

儀礼という形から見る文化の相互関係、相互作用の流れ？もしくは大きなフィールドの動きのようなものがあるのだなと思ったが、文化のソースをどこにたどるのかということは、日本に限ってもむずかしいことなのに、インドから中国から日本という大きな世界の中で考えることは大変。

そのとおり、たいへんなのですが、それがおもしろいということなのでしょう。起源や流れをたどるという作業は、歴史的なつながりを見つけることですが、このあいだのように、インド、中国、日本というように広範囲の地域を対象にすると、歴史学のような厳密さがなかなかともないません。しかし、文化の大きな枠組みや個々の文化の特色などは、細かいところを捨象してしまっても、大きなスケールの中から見つかるような気がします（私自身は、篋篋内傳に見られた南北の間違いのような細かいところも好きですが…）。この半期の授業では、儀礼を手がかりにそのような文化の枠組みや特色をいくつか示してみたいと思います。それを補うためにも、日本史や東洋史の学生の方などで、関連する文献などの詳細な情報をお持ちでしたら、教えて下さい。前回の内容の場合、陰陽道の文献で、篋篋内傳とは異なり、職人巻物の内容とよく合致するような文献の存在とかです。

密教にヴァーストゥナーガの記述がないにもかかわらず…というのが本当に不思議です。中国で何かが起こったという説だと道教でしょうか。盤古は道教に出ている気もしますし、道教と陰陽道でも共通点を見いだせるようにも思うのですが。そうなのです。私も驚いたのは、密教にないインドの儀礼が、なぜか日本の神道や大工の儀礼に出てくるところなのです。授業では「千年前のインドの儀礼が、只見地方の山奥に伝わっているのがすごい」と言いましたが、じつはそれはむしろそ

れほど驚きではありません。インドの密教儀礼（あるいはその起源となるヴェーダの祭りに似た儀礼）が、現在の日本でも行われているのは珍しくはありませんし、授業でもこれから紹介していきます。それよりも、密教に欠落している儀礼が、突然そのようなところに現れたことに驚いたのです。しかも、密教儀礼であればマンダラ制作儀礼として伝わる可能性が高いので、土地の浄化の目的で行われたはずなのですが、実際はインドの建築儀礼と近い目的で行われているのも驚きなのです。盤古については授業では簡単に触れただけですが、龍伏の儀礼を考えるカギになるのではとも思っています。道教、陰陽道、それに風水などがこれに関係する可能性があります。また、土公神や神楽もポイントです。土公神の神話では、世界を碁盤目に区切り、その四方に四季を配当して龍王の兄弟に分けて支配させたところ、五番目の龍の持ち分がないために戦争になり、調停にあたった神が四方から一部を削って、五番目の龍に与えて丸く収めたというのがあります。これは、神楽の重要な演目のひとつだそうです。四季を土地の四方に配当することや、それを龍が支配することなど、ヴァーストゥナーガや龍伏とのつながりを想起させます。前回配布した私の文章は、とりあえずこのトピックのおもしろさを伝えるために書いたもので、もう少し詳しく調べて、きちんとした論文にしようと思っています。

土公神の龍伏では、体は一年かけて 360 度回転しているわけではなく、春から夏にかけて、また秋から冬にかけて 180 度回転してしまっている。そこが興味深いと思った。

よく気がつきましたね。私も龍伏とヴァーストゥナーガでは龍（ナーガ）の動き方が異なることが気になっています。ヴァーストゥナーガの場合、

時計の針のように一年で1回転するのですが、龍伏はあっちを向いたりこっちを向いたり、連続しません。夏と冬を逆にするなどして現在の順序を入れ替えると、ヴァーストゥナーガと同じように連続するので、あくまでも推測ですが、伝承の過程で、順序が混乱したのではないかと考えています。前回、黒板で紹介したように、体の部位を示す順序や方角が文献によって異なりましたが、そのような変更の中で、四季との対応がずれてしまったのかもしれませんが。

疑問に思ったのですが、ヴァーストゥナーガの儀礼にしたがって、インドの建築（家の入口とか）が決められていたということでしたが、家の入口はいつの時点でのナーガの位置に合わせて決めるのでしょうか。建てる前なのか、完成予定日なのか、入口を作るときなのか…。また、そうすると、家の入口が少しずつ斜めになっていって、町の景観がめちゃくちゃになると思うのですが、そこまでしてナーガの儀礼に従う必要があるのですか。それとも、ナーガで町の景観を壊さないようにする方法でもあったのでしょうか。

家を建てる時期によって、家の向きが変わってしまうというのは、私も疑問に思っている点です。ナーガの位置を確認するのは、建築儀礼の中できまった段階ですから、いつから儀礼をはじめかで確定します。基本的には建てる前で、整地などをすませたあとです。家を建てる時期も占いなどで決定したと考えられますし、おそらく、季節によって建築に適不適もあったと思います（金沢でも冬場は雪が降るので不向きです）。それほどちゃらんぽらんには建て始めないと思いますので、それなりに統一感も生まれたのではないのでしょうか。また、あくまでもヴァーストゥナーガの検査は形式的にすませ、実際は現実的な理由（日当たりとか道とか隣接家屋との位置関係とか）から、家の向きを決定したでしょう。マンダラの制作儀礼で、家の向きではなく、土地の浄化としてヴァーストゥナーガの儀礼を行ったのは、マンダラの家の向きはすでに確定しているので、それには用いずに、他の目的に転用したからではないかと考

えています。

大工の秘伝書に古代インドなどに伝わる建築儀礼に通じるものがあるとは知らなかったのが驚きでした。インドにおいては「僧院などを建立する際の建築儀礼」と資料にはありましたが、普通の人々の家を建てる際は、顧みられるものではなかったのでしょうか。また、この場合において、インドでその知識を持つものは「阿闍梨」だけで、大工にはその知識はなかったのでしょうか。今回の講義では、宗教と大工の意外な結びつきを見ることができておもしろかったです。

インドの建築儀礼は、大工の棟梁のあいだに伝わったようです。知識階級のバラモンも関与したようですが、基本的には大工の領域です。これは日本の「番匠秘書」などでも同様だったようで、お坊さんではなく、大工が自らさまざまな儀式を行いました。密教儀礼としてのヴァーストゥナーガの儀礼は、マンダラを作る一部なので、密教の僧侶である阿闍梨（文字通りには先生という意味です）が担当しました。インドでどの程度、建築儀礼が行われていたかはよくわかりません。おそらくすべての建造物というわけではなく、寺院のような宗教建築、あるいは王宮のような大規模建造物に限られていたかもしれません。インドは厳格な階級社会なので、バラモンやクシャトリアで、しかも裕福な者たちも行ったと思います。今でもインドの村落に行くと、驚くほど小さな家に人々は住んでいます。このような規模の家屋には、いちいち建築儀礼は行わなかったでしょう。

土地の浄化については、建物の下になる土中に木炭など有機物があれば、腐敗するし、石（現代ではコンクリート塊）などが埋まっていれば、まわりの土と地耐力が違い、不当沈下を起こす。ということで理にかなっています。曲尺の裏には、病、離などの文字が刻してあります。その使い方を規矩術と呼び、聖徳太子が伝えた(?)と大工は言っております。

インドの建築儀礼も理にかなっているようですね。ヴァーストゥナーガの儀礼に先立って、土地の選

定と土地の判別という儀礼もあります。そこでも、いろいろな土地の条件が示されますが、おそらく実際の経験から蓄えられた知識なのでしょう。「番匠秘書」や三輪神社の「番匠の大事」には、そこで説かれる建築儀礼や作法が、聖徳太子の時代の奈良大工兵衛慰朝清という伝説の大工に帰せられています。おそらく、日本の大工の祖のような存在で、大工の権威付けに必要なだったと考えられます。ところで、石川県や皆さんの地元の大工さんは「職人巻物」のようなものをお持ちではないでしょうか？もしあれば教えて下さい。

今日の授業はとてもおもしろかった。はじめてヴァーストゥナーガやプルシャの儀礼を知ったとき、コミカルな格好のおじさんや蛇が、四角の中に書き込んであって、それを守らないとたたきがあるとか、まことしやかに言っているの、すごく変だ、笑える、インドっぽいと思っていました。しかし、同じ儀礼が日本にも伝わっていたなんて、その時点で衝撃でした。今日は三輪流神道や密教や陰陽道の話も出てきて、それらがリンクしていたこともはじめて知りました。しかし、中国にはないとかで、ミステリー小説のようなどんでん返しがあって、久々に90分集中できました。ところで、途中でマンダラは神のすみかということをおっしゃっていたので思いつきました。矢口先生のヨーロッパ建築の授業の最初のトピックが、神の家をデザインすることだったのですが、ヨーロッパ人は人智を越えた存在を感じさせるために、巨大で荘厳な空間を演出するという発想に至った。ということが印象に残りました。しかし、インド…ヴァーストゥナーガやマンダラでの神の領域をプロデュースするときの着眼点は、そのような目に見えるところではなく、その領域の神聖さや正統性を重視することにあつたのではないかと思いました。

私も、龍伏とヴァーストゥナーガについては、ミステリーのように思いました。日本とインドのあいだにブラックボックスがあり、そこがまだ謎のままなのですが、もしわかれば、さらにおもしろい展開になると思っています。宗教建築が神の家

であるのは矢口先生のおっしゃるとおりで、キリスト教の場合、古代ローマのカタコンベなどは、まさにそのとおりだと思います。それを大規模化するときの発想は、「神が人智を越えた存在だから」という説明も可能でしょうが、ほかにもいろいろあげることができます。たとえば、神の家ではなく「神の国」すなわち天国を地上に再現することもあったでしょうし、教会の構造を「神の身体」と重ねたり、十字架との構造の一致をめざしたこともあったでしょう（専門ではないのでよくわかりませんが）。インドの場合、たしかにそれとは違う発想があると思います。他の授業でも紹介しましたが、インドでは神やそれに関わることを、リアルには表現できないと最初からあきらめてしまう傾向があります。もちろん、神の家や神の国は、寺院などとして再現したいのですが、それを規模や豪華さで示すのではなく、単純化したシンボルなどで表すことの方が多いようです。東南アジアではアンコールワットやポロブドゥールのような大規模な「神（あるいは仏）の世界」があるのに対して、インドではそれに匹敵するものはありません。お椀を伏せたようなシンプルなストゥーパや、さらに小規模にして、円と四角だけでつくりあげるマンダラになってしまいます。

龍の体の部位や方角、季節の組み合わせがまるで暗号のようで、正直よくわからなかったが、今日の講義の内容が、シンポジウムでの発見だったということに驚かされました。どこに何がひそんでいるのかわかったものではない、もしかしたら意外に宝はすぐ傍らに転がっているのかも漠然と思いました。

話が複雑なので、授業だけではわからなかった人も多いと思います。配付資料の文章を読んで、理解してみてください。論文や授業のネタになるような宝が、どこにでもひそんでいるというのはそのとおりです。それだから、わざわざいろいろな学会やシンポジウムに参加して、最新の情報を入手するようにつとめているのです。比較文化のセミナーの授業では、いつも学生の皆さんに「質問をするように」と言っているの、私もこのシンポ

ジウムではヴァーストゥナーガとの関係で、その時点で気がついたことをコメントとして発言しました（陰陽道などについてはその後で調べました）。そのときに、儀礼と文献との関係について

も、インド学の立場からいくつか指摘したのですが、今回の授業でとりあげる「儀礼とテキスト」の基本的な考えも、そのときのコメントに由来するものです。

## 2. 儀礼とテキスト：インド学の視点から

神のための儀礼がいつの間にか儀礼そのものが大切なことになるというのは、何となくわかりますが、私たちだって、形式的にやってることが多いです。和室のふすまは踏んじゃだめとか、箸渡しはだめとか、どうしてやっちゃダメかもわからないけど、やっちゃダメっていられています。そういうのって、形式化の典型ではないかと思うわけです。いつも、どんなものでも、儀礼中心、形式主義的なことになるのではないのでしょうか。

まさにそのとおりです。儀礼というのはつねに形式主義に陥る結果になります。たとえば、われわれも日常的に「これは儀礼のようなもの」と言ったりしますが、その場合、「意味はないけど形だけしたがっておくもの」というニュアンスで「儀礼」という語を使います。そこでは、儀礼は因習や慣習となんら変わらず、人々の行動を非合理的に拘束するだけのものです。その一方で、儀礼とは日常的な世界に、非日常的な時空間を出現させる装置のようなものです。祭や特別な儀式（卒業式とか結婚式とか）を考えればいいでしょう。そこには儀礼がもつ刷新力のようなものが期待されます。いずれも儀礼がもつ本質であり、儀礼とはもともとこのような二面性を持った人間の行為なのでしょう。私自身は、そこにテキストの存在が重要になると考えています（これは授業では言及できませんでしたが、配付資料にも書いてありません）。テキストの存在は、この儀礼がもつ「形式化」を確実にするとともに、それをつねに変化させる可能性ももっています。たとえば、前回紹介したヴェーダ祭祀において、新しい層の儀礼では、儀礼の解釈や説明までも儀礼の中の言葉として唱えられると言いましたが、これによって、そ

れまでの儀礼をあたらしく作り替えることができます。形式主義に堕した儀礼を、ことばによってよみがえらせることができたのではないかと思います。なお、われわれの日常的にやっている形式化されたことがすべて儀礼というのも、ただしいとらえ方で、ひとりの儀礼研究ではそのような立場をとる研究者が多かったのですが、それによって、儀礼研究の対象が拡散しすぎて、かえって実りある考察が生まれなかったようです。現在の儀礼研究の低調さの原因のひとつも、そのあたりにあるのではないかと思います。

**儀礼は神話やその起源を表しているということだが、たとえば、日本の能などでも、神話や伝承の再現をする。芸能の起源は「物まね」らしいが、儀礼が何らかの再現であることも関係しているのかもしれない。**

すべての儀礼が神話の再現ではありませんが、多くの儀礼がそのようなものであるのもたしかです。宗教学者のエリアーデはとくにこの点を強調しますし、数ある神話の中でも、創世神話が儀礼の基本になっているとも言っています。儀礼の中で、神々かわりに人々は宇宙を創造するのです。芸能と儀礼の関係も重要です。芸能の多くは神事に由来します。能や歌舞伎などの日本の伝統芸能のほとんどはそうなのではないのでしょうか。

**ヴェーダ＝聖典というイメージは捨てると言っていたが、それならどうして高校の世界史では、聖典であるかのように教えてしまうのだろうか。バラモン教の聖典のようなイメージを持っていたが、話を聞くと、本当にバラモン教が「宗教」であっ**

たのだらうかと思ってしまうのだが…。

基本的に、教科書というのはそれほど最新の研究成果が含まれているものではありません。この場合はとくに「聖典」という言葉の意味が問題なのでしょう。宗教的な文献を「聖典」と呼ぶのであれば、ヴェーダ文献も立派な聖典です。しかし、聖典からイメージされる聖書やコーランと、ヴェーダ文献は相当に異なります。神々への讃歌を中心とした口誦伝承の総体で、儀礼の説明が中心であるというのが、ヴェーダ文献の最も簡単な定義です。なお、キリスト教（そしてユダヤ教）の旧約聖書には、このような儀礼に関する記述が意外に多く含まれます。古代の人々にとって、神の御心にかなうのは、信仰心だけではなく、それをどのように行為に移すのが重要だったのでしょう。バラモン教が「宗教」であるかどうか、宗教の定義によりますが、私はこのような儀礼中心の考え方も、宗教ととらえた方が適切であると考えています。現代の日本人の宗教観とはかなり異なるかもしれませんが。

私は以前の仏教文化論をとっていたのですが、この授業でも同じ神話があげられるとは思わなかったのが、感心しました。ひとつの神話からさまざまなことが読み取れるのですね。今回、関心を持ったのは、インドの儀礼において、テキストが占める位置が大きいということでした。無文字の文明が儀礼をもつ場合を考えても、必ずしもすべての文化において、儀礼とテキストが結びつくわけではないと思うのですが、なぜ、インドではここまでテキストと儀礼が密接に結びつくことになったのか気になりました。インドでの言葉のあり方は、たいへん奥が深いもののように思えます。

ウルヴァーシーとブルーラヴァスの神話は、たしかに昨年の仏教文化論でも取り上げました（授業全体のテーマは「エロスとグロテスクの仏教美術」）。同じネタの使い回しですみません…。でも、結構おもしろい神話ですし、神話と儀礼の関係を示すには格好の題材なのです。テキストと儀礼の関係と、その背後にある言語観は、たしかに重要です。今回紹介しますが、ヴェーダの補助学には、

言語に関する分野がたくさんあります。私は、儀礼の中の言葉のイメージとして、儀礼という装置を動かすための、エネルギーと思っています。儀礼というのは人間も道具も場所も含む壮大な装置のようなものなのですが、これを動かすために、インドでは言葉を用いたのです。人間の行為が装置を動かしているように思うかもしれませんが、行為も儀礼の一要素にすぎません。儀礼行為が意味を持つのは、その意味を与える言葉だからです。言葉やテキストに力があるというのは、このようなイメージから来ています。言葉そのものの神秘的な力についての考察も、インドでは古来盛んでしたし、文法学派と呼ばれるような人々を中心に、言葉に関する探求は、インド哲学の大きな流れを作っています。

ウルヴァーシーにブルーラヴァスの裸体を見せないという条件は、夫婦という関係に矛盾しませんか。火おこしの道具をふたりに見立てた上、火を子どもとする以上、セックスをしないとは思えないのですが、それとも、キリスト教のマリアのように処女懐胎ということなののでしょうか。そもそも神々がそうした条件をつけた意味が気になります。（ふたりを引き離すための策略のためだけ？）

神話の解釈はおもしろいですね。私はこの物語のカギは雷だと思っています。ふたりの別離の契機となったのが、雷です。しかし、それによって、その後の物語の展開が生まれ、その結果、子どもであるアーユスが生まれます。ブルーラヴァスの生殖能力は、雷によって象徴されているのです。雷から火が生まれることも、容易に理解されますが、アーユスこそ、儀礼における火です。「裸体を見せない」という条件は、逆に見れば、時期が来るまでは生殖能力を發揮しないということでしょう。神話や昔話においてタブーとなっていることは、しばしば物語を成立させるためのカギになります。雷が生殖能力の象徴であるのは、インドラという神のシンボルが、雷に由来するヴァジュラ（仏教では金剛と訳します）であることから想像できます。インドラはヴェーダを代表する勇

壮神ですが、それと同時に好色な神としても知られます。話は飛びますが、密教ではヴァジュラに相当する金剛杵を男性原理とみなしたり、それを手にする普賢菩薩を安産祈願の仏にしたり、雷の生殖機能を意識した考え方が随所に現れます。昨年の仏教文化論では、このようなことをテーマにしました。

**フィールドワークを中心とする民俗学、史料中心とする歴史学、どちらかだけではなく、両方用いたら、あらたな学問ができるのではと感じた。**

たしかにそうなのですが、そんなに簡単にはいかないのが、学問の世界です。インド学では 20 年ほど前から、人類学者と文献学者（古典研究者）のあいだで、学際的な共同研究が盛んに進められました。それほど大きな成果を上げずには下火になっています。私自身もそのいくつかに参加した経験がありますが、現在ではあまり魅力を感じていません。研究発表自体は興味深いのですが、それを自分の研究に生かしたり、あるいは、共同で何か新しい成果をあげるところまでにはなかなかつながらないのです。おそらく、フィールドワーカーと文献学者は、最終的にめざすところが決定的に違うのではないかと考えています。これを、比較文化の故島先生は、インド学の学際的研究のドレッシング説と呼んでいました。サラダ油と酢をどれだけ混ぜても、しばらくたつと元通り、分離してしまうイメージです。金沢大学の人文学類では、フィールド文化学という分野がたてられ、私もそのメンバーですが、このような結果に陥らないようにと用心しています。

**ウルヴァーシーの神話と「羽衣物語」が関係があるのですか。もっと調べたいと思います。それで、先生がヴェーダなどの名前を全部カタカナで書いていらっしゃるの、気になりました。ローマ字で書けばどうでしょうか。**

ウルヴァーシーと羽衣伝説は関係があるかもしれませんが、天界の女性と地上の男性の婚姻の物語

は、広く世界中に見られると思います。日本でも羽衣伝説以外に、雪女や鶴の恩返しなどもそうです。結末が悲劇的であるのも、ほぼ共通しているでしょう。神話の伝承をたどるのはおもしろいのですが、エスカレートすると、単なる「似たもの探し」になってしまうので、しっかりした方法論が必要だと思います。サンスクリットをカタカナで表記するか、ローマ字で表記するかは、やっかいな問題です。ローマ字の方が正しい表記ができるのは当然ですが、サンスクリット固有の記号がありますし、読み方もたどるべきでないかもしれませんが。カタカナ中心で、必要に応じてローマ字という方針で進めることになると思います。

**真実語が誓願になるのはわかりませんが、それが加持祈禱になるのは飛躍があるような気がします。加持祈禱というのは、本質は呪文を唱えることにあるかもしれませんが、その他の動作や祭場も含めた言葉のように思えるので、儀礼の要素がまた入ってくるのではないのでしょうか。真実語→誓願→真言という理解では間違いがあるのでしょうか。たしかにそのとおりですね。真実語は言葉そのものを指すので、それに対応するのは真言や陀羅尼になります。誓願は言葉ですが、同時に誓願するという行為も指します。それに対応する密教儀礼が加持祈禱ということになります。真実語の場合、特定の儀礼や儀式の名称ではないので、真実語を唱える呪術的行為が出发点になり、それに誓願という性格が与えられて、さらにそれにふさわしい形式や場所をとまなうようになると、儀式化され、その流れをくんで、密教儀礼としての加持祈禱が現れるということになるのでしょうか。その中の言葉として、意味よりも音を重視する真言や陀羅尼に、重要な役割が与えられていることになります。しかし、真言とはマントラのことで、マントラ自身はヴェーダ祭式において神々に唱えられる言葉を指す語です。言葉が儀式を動かすというパターンが、密教儀礼ではふたたび姿を表すのです。**

### 3. 聖と俗の接点：古代インドの祭式の世界

インドでは神は宇宙を作るが、宇宙＝神であり、人間も宇宙＝神の一部なのに対し、キリスト教では神と宇宙は別物だということに納得した。日本でも山や岩などに神を見だし、自然崇拜が行われていましたが、キリスト教ではそういったことをまったく聞いたことがなかったので。日本ではキリスト教よりも仏教が普及しているのは、距離的、時間的な問題だけではなく、そういった要素も関係しているのでしょうか。

はじめのころはそうなのですが、自然崇拜と結びつける云々という点については、私は少し考えが違います。宇宙は神であるというインド的理解と、自然には神が宿るとするのは、かなり異なる考え方だと思うからです。宇宙が神であるというのは、宇宙全体をひとつのまとまりとしてとらえ、それが神として顕現しているということです。これに対し、日本的な「神が宿る」というのは、全体は問題にされず、われわれのまわりのさまざまな構成要素に、神がひそんでいるという理解です。そこでは、宇宙全体の創造や持続、消滅などが意識されることはありません。基本的に、日本人は「宇宙」とか「全体」といった考え方が不得手な民族だと思えます。われわれのまわりにあるのは、山や川や田んぼであり、それは漠然とした広がりをもってはいますが、特定の構造をもっていません。別の言葉で言えば「自然」なのですが、自然は全体がひとつのまとまりをもたず、われわれと自然との関係もあいまいです。そう考えると、一元論を基本にする古代インドの梵我一如の思想などは、およそ日本人には理解しがたいものなのでしょう。むしろ、創造主を世界の外に置いているヨーロッパの思想の方が、日本人の世界観よりもインドに近いかもしれません。ちなみに、昨今の環境問題に関しても、欧米の方が危機意識が高く、日本人に切実感がないのも、宇宙全体をひとつのシステムとしてとらえることに、われわれが慣れていないからとも思えます（飛躍しすぎかもしれませんが）

が)。

ヴェーダ祭式の中の宇宙・祭式・祭官そして作用を及ぼす力もすべてブラフマンで、祭官によっても力が生み出されるのであれば、たがいにどれもブラフマンでありながら、力を及ぼし合っている気がして不思議でした。

たしかに不思議ですね。でも、一元論というのは、そういうものなのでしょう。このような考え方は、おそらく通常の状態では理解不可能というか、発想自体が生まれなかったでしょう。そこで重要なのは祭式で、その非日常的な状態で、おそらくトランスに入ったようなバラモンたちが直観したのでしょう。

今回見せてもらった写真に、ヴェーダを学習するバラモン親子がいましたが、なぜ、文献を見せるのではなく口承なのでしょう。また、ヴェーダには4種4部門があるとおっしゃっていましたが、子どもの頃からすべて覚えさせられるものなのか気になりました。それにしても、インドには多くの儀礼があることに驚きました。しかし「儀礼」をあらわすことばに「行為」の意味を持つ言葉があるということから、さまざまな行動に神がいて力があると思われていたのかもしれない。今回見たのはほんの一部なんだろうとも考えました。あと、私的には儀礼と火の関係にも興味があるのですが、やはり、神話が絡んでくるのでしょうか。

ヴェーダはすべて覚えるわけではありません。大きく4つのヴェーダに分かれるのは、それを担当する祭官が4種類いるからです。さらに、それぞれのヴェーダの中の、どの部分を専門とするかで、さらに細かく分かれたでしょう。おそらく、儀礼に即した実践的な知識として、特定のヴェーダを学修したと思います。しかし、それでも膨大な量の知識を記憶しなければならなかったはずで

口承伝承は、われわれから見ればたいへんなことで、不正確だと思えるのですが、おそらく、人類がもっていた重要な能力だったのでしょう。ヴェーダの文献は、想像を絶する正確さで、驚くべき長い年月にわたって伝えられました。ホメーロスのイーリアスとオデュッセイアも、あるいはインドのマハーバーラタやラーマヤナもそうですが、とてつもなく長い文章を、人々は口承伝承で伝えています。文章に書くという記録方法は、むしろ、それほど優れていると思われていなかったのかもしれないかもしれません。書き間違いをすることもありますし、書いたものがなくなれば、それっきり二度と復元できません。極論ですが、人間は文字と筆記を発明したことで、記憶能力を退化させたのでしょうか。現在のパソコンの普及は、それにさらに拍車をかけていることになります（単なる私の記憶力の減退の言い訳かもしれませんが）。インドにはさまざまな儀礼があるのはそのとおりです。授業で紹介したのは氷山の一角どころか、砂漠の一握りの砂程度です。儀礼と火と神話の関係は、今回少しふれますが、あまりくわしくは取り上げられません。火そのものは密教の護摩のところで、もう一度あつかいます。

**祭壇を儀礼のあとで焼却してしまうのが意外だった。日本では祭壇の再利用も多いような気がする。しかし、燃やすこと自体が儀礼なら、何かいろいろな意味があるのかもしれないと思った。儀礼の形式化によって、儀礼の持つ力が失われるのはわかるが、伝統が生まれるというのが不思議な感じだ。三千年前の儀礼が伝わっているというのは、それなりに形式化された結果なのだろうか。**

祭壇を破壊して焼却するのは、古代インドの儀礼のひとつの特徴です。祭壇に相当する日本の護摩炉や壇は、破壊されることはありません。儀礼のあとでその舞台や装置が壊されるのは、マンダラの場合も同様です。これについては、マンダラ儀礼の時に紹介しますが、簡単に言えば、宇宙創造が儀礼の主題であるならば、次の儀礼でまた創造するために、いったんその宇宙には消滅してもらわなければならないということです。また、儀礼

の場というのが非日常的な空間であるならば、儀礼が修了して日常が回復したときに、非日常的な空間がそのまま残っているのも都合が悪いです。儀礼が形式化されることと伝統については、相撲とか華道とか茶道を考えればいいのではないのでしょうか。部外者から見れば何の意味もないような形式が、ずっと継続され、それが伝統とよばれています。しかし、それを省けば合理的になるかといえば、そんなことはなく、それそのものが存在理由を失ってしまいます。そういう意味で「三千年伝わる云々」というのはそのとおりで、形式化されることが合理的でかつ洗練された結果なのです。しかし、それによって、形骸化も起こり、儀礼そのものの持つ力が失われる危険性があります。

**火と水の話で思い出しました。仏教の儀礼で阿闍梨が火の中にいろんなものを投げて燃やすというのがありますが、あれはヴェーダの儀礼と似ていますね。阿闍梨の場合は香木だかなんとかを浮かべた水を用意するそうです。ヴェーダのそばに水がありましたが、あれも香木が浮いているのでしょうか。そして、どんな意味があるのでしょうか。それが護摩です。ヴェーダの儀礼を「ホーマ」といいますが、それが発音どおりに中国で訳されると「護摩」になります。護摩は1回分の授業を予定していますので、そこでヴェーダ祭式との関連もお話しします。火と水がそろって現れ、儀礼で重要な役割を果たすのではという指摘は、鋭いです。火の儀礼であるホーマは、同時に水も重要なアイテムとして持っています。私の理解では、火も水も神々と交流するための回路となるのです。ちなみに、火と水は正反対の、相容れないものではなく、古代インドでは親密な関係にあります。火の神アグニは水の中に隠れることでも知られています。火も水も、単なる物質である場合と、生命を持った「生き物」である場合があるのも、共通です（これについては私の『マンダラの密教儀礼』の第5章のはじめで紹介しています）。**

**バラモンは昔々のことだと思っていましたが、現**

在でもいることを今日知りました。祭壇を燃やすことで思い出したのですが、日本の神輿も壊されたり燃やされたりすることがあるそうです。神の乗り物であり、祭りの期間中は神そのものになる神輿ですが、厄神を乗せて厄神を村の外に追い出すことをする祭りがあるそうです。その厄神を載せた神輿は焼かれることがあるそうです。

儀礼の道具を燃やすことには、そのような意味もたしかにありますね。日本の儀礼や祭礼では、そのような事例が多く見られそうです。インドでも、ドゥルガープージャーという女神の祭りで、同じようにドゥルガーの神像を祭りの最後に河に流します。ガネーシャの祭りでも同じようなパターンがあります。インドでは神の像に厄を乗せるという感覚はおそらくないので、意味は違うようですが、形態はよく似ています。日本の民俗学では、ケガレという観念が重要で、儀礼の基本的なところに、このケガレをいかに無くすかがあります。厄もケガレの一種です。

祭官と祭主は違うのですか？祭式の役割からすると、祭官の方が重要な位置にいるし、重要な役割

を果たしているように見えるのですが、祭主の方が地位が高いのですか。

いわゆるカースト制度では、バラモンが社会の最高位にいます。その下が王侯貴族や戦士階級のクシャトリア、その下に一般のヴァイシャとなります。祭主はこれらのクシャトリアやヴァイシャが中心だったはずですが（とくにクシャトリア）。カースト制度ではヴァイシャの下にさらにシュードラがいますが、シュードラはアーリア人ではないので、ヴェーダの祭式には関与できません。バラモンとクシャトリアとでは、バラモンが上でクシャトリアが下となっていますが、もともとは、社会の上層階級が、それぞれの職能に応じて分業したと見る方が自然です。ただし、戦争や国家の存亡に、直接作用を及ぼすことのできたバラモンが、クシャトリアよりも上位に置かれるようになったのも自然の流れでしょう。バラモンが儀礼を行うことで、王位に就くことができ、戦争にも勝ったのですから（実際は武力で勝ったとしても）。そもそも、神と直接交渉できる能力を持っているのは、バラモンだけです。

#### 4. ヒンドゥー儀礼の形成：プージャー（供養法）を中心に

奉献型の儀礼では、神と人が同じ空間を共有すると説明がありましたが、それは、もともと神は人と同じ空間に存在しているという考えですか。それとも、儀礼を通じて神が人のいる空間に降りてくるといふ考えですか。

重要な指摘です。これまで見てきたように、神と人との関係が、インドでは儀礼の重要なポイントとなります。前回の授業では奉献型儀礼の神と人との関係を簡単に図示しました。ずいぶん単純な図ですが、それなりに考えて書いたもので、両者が水平の位置関係にあり、神の方が人よりも少し大きな楕円で描きました。これは、神の像を前にした人をイメージしています。初期のヴェーダの祭式では、神々が天上世界にいて、儀礼の時には

アグニが供物を運ぶための媒体になることは、授業で紹介したとおりで、そのときにはアグニ以外の神々は儀礼の場にはやってきません。後期のヴェーダ祭式では、神々も儀礼の要素となりますが、その場合も天上世界から儀礼の場にやってくるというわけではありません。神々の領域も含めた全宇宙が、儀礼の空間に投影されているだけです。これに対し、プージャーの儀礼では、始めと終わりにお迎えとお帰りがあるように、儀礼の場に神がやってきて、接待を受けて、再び帰るといふ構造をとります。これは本来、人間に対する賓客接待の儀礼がモデルになっているのですが、それが神に応用されているのです。その背景には、ヴェーダ時代の宇宙原理的な神から、ヒンドゥー教の

人格神への変換もあるでしょう。それとともに、ヒンドゥー寺院ができ、その中に神の像が祀られるようになったことが重要です。ヴェーダの祭式では、神は像の形で表されることはありませんでした。整備されたプージャーはこのような寺院、人格神、神像がそろっているのが特徴です。さらに、プージャーの接待を受ける神は、神像の姿で寺院に常にいるので、お迎えやお帰りが不要であるため、「目覚め」と「就寝」という形をとることもあります。現在、ヒンドゥー教の寺院ではプージャーは毎日行われることが一般的で、神の生活のリズムに合わせて行うのです。寺院は「神の家」であり、人間はそれにお仕えしているのです。このような考え方は、ヴェーダの祭式にはありません。

火を祀ったりする文化はよく聞きますが、水を中心とした儀礼は、あまり聞いたことがないのでおもしろいと思います。また、以前、地元の山形でも「土公神」のような信仰があると書きましたが、むこうでは「大將軍」などとよばれる方位神のようです。やはり関係があるのでしょうか。

火は目立ちますのでわかりやすいですが、水もけっこういろいろな文化で儀礼の中心になります。日本でも神道でおこなわれる禊（みそ）ぎのように、水による浄化が基本です。水をお供えることも広く見られます。あたりまえすぎてなかなか気づかないこともあるようです。インドの奉獻型の儀礼で水が用いられるのは、水を媒介として人と神がコミュニケーションをとれるという発想が基本にあるのではないかと思います。土公神や大將軍については、くわしい情報があれば教えて下さい。大將軍というのは朝鮮半島の民間信仰でよく登場するような気がしますが…。

プージャーの水の関伽水は、祭壇に供える水として日本の古典の中にも何度か出てきていたことを思い出しました。日本には洗足水・嗽口水にあたるものはないのが気になります。「神を接待する」という発想が他の儀礼と違うところなのでしょうか。

私も「関伽」という言葉は高校の古典の授業ではじめて知りました（たしか『方丈記』）。古語辞典などを引くと、源氏や平家などにもよく出てくるようです。熟語として関伽棚、関伽器、関伽堂などもあります。Wikipediaの「関伽」の説明もほぼ適切です。その中に紹介されていましたが、「ラテン語の「アクア」(aqua)の語源という説もあるが俗説である」とありました。アクアと関係がある語はサンスクリットでは「アプ」もしくは「アープ」で、関伽の語源の「アルフ」とはまったく別の言葉です。さて、関伽水の他に洗足水や嗽口水はないかという質問ですが、ちゃんとあります。今回取り上げる護摩もそのひとつです。日本仏教の儀礼の起源は、インドにたどれるものが多く、名称や方法もほぼ忠実に伝わってきます。関伽というのは狭い意味では、授業で紹介した3種の水のひとつですが、これらの総称としても用いられます。洗足水も嗽口水も関伽なのです。日本ではこの総称としての関伽が一般に用いられたのです。

前回の仏教文化論の講義で聴いたのか、自分で本を読んだのか記憶があいまいなのですが、インドにおける神々の飲み物が人間にとっては「酒」か「媚薬」「ドラッグ」などに類するものだという話を聞いた覚えがあります。ソーマ祭で使用されるソーマは、もしかして「神々の飲み物」に通じるところがある。あるいは、そのような神話と関係があるのだろうかと思いになりました。また、アシュヴァメーダという祭式がおもしろく感じました。かける期間も一年と長いですし、儀礼がどれだけ人々の生活に密着しているのかがよくわかる気がします。些細な疑問なのですが、途中で馬が死ぬなどしたら、やはり代理の馬をたてて続けるのでしょうか。壮大な儀礼なようですし、途中で断念は無理なように思われます。

ソーマはたしかに神々も飲みました。とくにインドラがソーマを飲んで英気を養ったことが、リグヴェーダにはくりかえし説かれます。『インド文明の曙』から該当箇所を、今回の資料に添付しました。アシュヴァメーダについては、私自身のヴ

ヴェーダ祭式の知識がそれほどありませんので、これも他の文献資料を添付しました（訳が少しわかりにくいですが、イメージはつかめるとと思います）。

松原（1967）に書かれている神をもてなす方法は、能登に残っている風習「あえのこと」と酷似していると思います。浴室に案内し、座敷へ導き、酒、魚でごちそうする。プージャーも「あえ（饗）のこと」も、意味は同じなので、興味深いです。ただ、能登の場合、神が帰るのは来春ですが。

私も金沢に来てはじめて「あえのこと」を知ったときは、プージャーと同じと思いました。「あえのこと」の起源はインドのプージャーであるという論文や本は見たことはありませんが、調べてみるとおもしろいかもしれません。一般には「あえのこと」は日本の古い信仰ということで説明され、ユネスコの無形文化遺産の後補にもなっていますが、インドからの外来の儀礼であったとすると、かなりその位置づけは変わってくるでしょう。能登は古くから真言や天台の密教が盛んだったところなのも気になるところです。高野山のあたりの和歌山でも弘法大師信仰や祖霊信仰の形で、よく似た接待儀礼が行われているという研究もあります（日野西眞定 1999 「弘法大師と先祖信仰」『説話・伝承学』7: 11-26）。

プージャーにおいて、ヴェーダの互酬関係がない（見返りは期待しない）ということですが、接待であるにしても、何か理由があるような気がするのですが、本当に何も無いのですか？ 儀礼がユニットの集まりとするなら（プージャーには当てはまらないかもしれませんが…）他の儀礼のためのプージャーだったりしないのでしょうか。

そのとおりで、プージャーはそれ自体が独立した儀礼であると同時に、他の儀礼を構成する基本的なユニットとなります。これはアルガや護摩、バリも同様です。神々や仏を儀礼の場に招くことは、ヒンドゥー教や密教の儀礼の基本ですが、その神々を迎えるために、アルガが与えられたり、プージャーが行われたりします。十六段階からなる

プージャーそのものも、その中にアルガを含んでいます。日本では、護摩は独立しても行われる密教儀礼ですが、灌頂などの大規模な密教儀礼を行うときには、しばしば平行して行われます。インド世界の儀礼の基本的な特徴として、ユニットで構成されるというのは、このようなことを意味しています。儀礼を拡大し、体系化するときには、基本的な儀礼がユニットとして利用されます。その場合、基本的な儀礼が「見返りを期待しない」儀礼であっても、全体の儀礼にはそれぞれの効果や結果が期待されます。

火の儀礼は火神アグニを介してのものだが、プージャーの水の儀礼に関する水神はいるのだろうか。河の神などは違う気がするのだが。

プージャーやアルガの水には水の神は登場しませんが、ヴェーダやヒンドゥー教には水の神がいます。ヴァルナとって、古くはミトラと並んで、ヴェーダの神々の中の至高神のひとりです。今回、水が「誓誠」と結びつくという話を紹介しますが、まさにヴァルナはそのような神で、人々が何か違約行為をすれば、かならず懲罰を与える恐ろしい神です。儀礼の水は神格化されていませんが、水そのものがそのような重要性を備えていると考えたのでしょうか。なお、河の神もいろいろいて、サラスヴァティー（弁財天）はその代表ですし、ガンガー（ガンジス河）やヤムナー（同名の河）も女神として信仰されます。ただし、いずれも儀礼との結びつきは希薄です。ガンジス河の水のように、儀礼で用いられる水としては重要な役割を果たすことはありますが。

見返りを求めないで、神仏をもてなすというのは不思議な気がした。でも、日本での墓参りや仏壇の供養を考えてみても、見返りを求めているというわけではないかもしれない。水や花を供えて一定の行為をすることで、安心感のようなものを得ているだけで、神仏からの見返りを期待しているとはいえない気がする。

儀礼をはじめとする宗教行為の目的が何であるかは、宗教を考える場合、重要です。インドではバ

クティとよばれる宗教運動が中世盛んになります。バクティは「信愛」とも訳されますが、神々への絶対的な信奉や帰依を指す言葉です。ただひたすら神を信じ、神を愛し、恩寵を感謝することが重要で、それによって、来世は天界に生まれるとか、お金が儲かるとかいう話ではありません。つまり、愛には見返りは必要ないのです（そうですね？）。日本では浄土真宗の教えに似ています。親鸞教学では、一般の浄土教の教えが主張する極楽往生や来迎などは求めません。阿弥陀の慈悲に感謝することだけが、われわれに可能であるという教えです。そこでは念仏さえも意味を失います。

儀礼の写真が七輪でキャンプファイヤーをしているみたいでした。炉はイラストしか見たことがなかったのですが、土か何かコンクリートみたいなものでできているんですね。水戸黄門で宿で足を洗

うシーンは、私もよく印象に残っています。たしかに、正月の神棚にも、仏壇にも、盆の墓参りにも、水と香は欠かせませんね。そう考えると、神や祖霊を招いておもてなしする儀礼では、水、食べ物、嗜好品（酒、茶、香）はどこでも必需品です。

写真で紹介した護摩の炉は、現代のヒンドゥー教のものなので、簡便なものが使われていたようです。本来は、土でできた大きさと形で作ります。神々をもてなすという儀礼形態は、たしかに日本では広く見られますが、キリスト教やイスラム教ではおそらく見られないでしょう。日本的と思われるものが、実は外来の習慣で、かつ、必ずしも普遍的なものではないと、私はとらえています。ところで、神道でも水や榊、塩、酒、魚（するめなど）はそなえますが、お香は使わないような気がします。

##### 5. 密教儀礼への転換：護摩、十八道次第にみられるインド的要素

・護摩で火天の儀式に本尊が割り込むという話ですが、本尊だから割り込ませるのはわかりますが、ではなぜ最初から前後に分けないのでしょうか。火天を招く→帰る→本尊を招く→帰るではダメなのですか。本尊が帰るまで火天は帰ってはいけないのでしょうか。

・護摩の際にいったん、火天には待機してもらおうということですが、それだと火天がお怒りになりそうな気もするものです。本尊がメインであるとはいえ、何とも人間の都合よく儀礼を変化させているものだと感じました。

よく似た質問なので、あわせて紹介しました。もっともなのですが、儀式の最後まで火天に残ってもらうのはふたつの理由があります。ひとつは、護摩がそもそも火を用いた儀礼であるため、その火がある限り、火天は儀礼の場にとどまるということです。本来のヴェーダ祭式のホームの場合、火天は神々の中で唯一、祭場すなわち儀礼の場で活躍する神です。先週紹介したように、火を表す

普通名詞がアグニすなわち火天です。もうひとつの理由は、インドの儀礼がユニット構造からなることと関係します。基本的な儀礼をユニットとして、さらに大きな儀礼を構築するとき、しばしばひとつの儀礼をふたつに分けて、その間に別の儀礼を差し込むという形式をとります。それによって儀礼全体の力が維持されたり、さらに強力になるのです。これはヴェーダ文献にも見られる説明だそうです（ヴェーダの専門家からお聞きしたことで、私自身は確認したことはありませんが）。ユニットを単に並列に並べるのではなく、サンドイッチにして、あらたに全体を大きなまとまりとするのでしょう。この全体が、あらたなユニットとなって、さらに別の儀礼を構築することもあります。一種の建造物のイメージです。

遠くから来た仏教というものが、いまでも日本に根付いていることだけでもすごいのに、細かい儀礼までもが、日本でも体系化されて行われている

ことは貴重な文化であると思います。この授業を受けていると、知らなかったことがつぎつぎと出てくるので、カタカナ言葉の理解が追いつきません。後、儀礼の様子を見せてもらおうと、呆気にとられてしまって、すごいなぁ…という感想くらいしか出てきません。

仏教の文化は本当に多様で、それが日本ばかりではなく、アジア全般に受容され、継承されていることに、私も驚きを覚えます。私の専門とする密教の場合、儀礼や美術がじつに忠実に受け継がれています。これは、同じ仏教でも、浄土教や禅宗と違うところです。比較文化の対象として、密教はとても魅力的なのです。ただし、それはたしかに貴重な文化なのですが、単に、古いものを伝える貴重なものというだけではなく、今なおわれわれの考え方や生活に大きな影響を持っていると思います。儀礼を取り上げるのは、外国の変った風習を知るということではなく、そこに見られる人間の思考や行動のパターンが、われわれ自身のそれらを知る手がかりになるからです。儀礼というのは、そのようなものを誇張したり、図式化したようなものだと思います。なお、カタカナ言葉の氾濫は、わかりにくいですね。前は儀礼や水の種類を示すために紹介しましたが、これからはそれほど出てこないと思います。儀礼の様子はビデオや DVD などで紹介するといいいのですが、私はあまり動画に関心がなく、ほとんど持っていません。写真が精一杯です。「呆気にとられて」もらえるのはいいことです。全然知らない世界を知ること、学問の醍醐味です。

だんだんこんがらがってきたのですが、ヴェーダは全宇宙を再現するような儀礼だったかと思いますが、護摩みたいな、アルガを使うような儀礼は、また違うイメージのもと行っているのでしょうか。はじめのころのヴェーダ祭式のような壮大な儀礼は、いったいどこに行ってしまったのかと、思えますね。たしかに、宇宙を相手にするような壮大な儀礼は、奉献型の儀礼ではほとんど見られません。バリもアルガもプージャーも、人と神（あるいは尊敬すべき人）とのあいだの交流でしかあり

ません。しかし、すべての儀礼が全宇宙的なスケールをもつとは限りません。むしろ、そのような要素を排除したところに、奉献型儀礼の特徴があるようです。日本の儀礼を考えた場合も、もともと宇宙や世界という概念にとぼしい民族であるから当然なのですが、宇宙が問題になるようなことはほとんどないでしょう。今回取り上げるマンダラ儀礼では、少し宇宙的な儀礼が登場します。

以前、日本中世史概説か何かの授業で、水取りのビデオを見た覚えがあります。達陀の様子もうつっていて、その迫力にすごいなぁという感想は持ったのですが、なぜ、お水取りに火が使われるのかまでは深く考えませんでした。火天、水天といった関係など、ちゃんと意味を持って、ひとつひとつの儀礼が構成されているのだと考えると、おもしろく感じられました。私も水と火はどちらも相性の悪いものにとらえがちになるのですが、まったく違った概念から、このような儀式が生じてくるのはとても興味深いです。日本においてお水取りの他にも、火と水が相性のよいものとして、そのふたつを取り入れた儀式はあるのでしょうか。自分でも少し調べてみたいと思います。

平瀬先生の授業ですね。お水取りの様子は NHK のドキュメンタリー番組で取り上げられたこともありますし、おそらく図書館にもお水取りのビデオがあるのではないかと思います。私は授業でも少しふれましたが、20 年ほど前に実際の様子を見せてもらったことがあります。といっても、内陣の外から、格子の合間から見るような感じで、全体像はよくわかりませんでした。たしかに達陀の迫力などは、強烈な印象として残っています。その頃はまだ儀礼の知識もなく、奈良時代の仏教についてもよく知らなかったもので、もう一度、生で見たいと思っています。日本の儀礼で火と水が両方出てくるものは、たぶんいろいろあると思いますが、密教儀礼以外をあまり知らないなので、具体的な例が思いつきません。ぜひ、自分自身でも調べたり、地元などで何か事例があれば、教えて下さい。

水と火に関して、不動は火炎を背負っていますが、日本各地に「水掛不動」があります。あれも「火と水」のインドの思想の流れなんでしょうか。また、五輪塔も地水火風空と火と水は接していますが、たまたまで関係ないのかもしれませんが。

水掛不動は水曜の不動の授業でも取り上げる予定をしています。日本では他にも不動は水と関係することが多く、感得説話の舞台が川の近くであることもそのひとつにあげられます。水はわれわれの世界と異界との境界であるとともに、その通路にもなります。川から流れてきたもので、異界とつながりを持つという物語もあります。桃太郎もそのひとつでしょう。不動が水と関係するのは、水の持つこのような性格や機能によるものと考えています。水が流れるものとしては、川の他にも滝がありますが、滝も異界との通路になります。その一方で、滝は蛇や龍のイメージとも重なります。不動が俱利伽羅剣という龍が巻き付いた剣を持つのも、滝のイメージが重なっているのではないかと考えています。一方の火ですが、不動のイメージそのものがインドに求められないのでよくわからないのですが、火炎の光背を背負うのは不動に特別なことではなく、忿怒尊一般でも見られます。怒りやエネルギーが形を持ったものとして、このような火炎が表現されると思うので、水との関係は希薄ではないかと思えます。なお、五輪塔

の地水火風空は、世界を構成する基本的な元素で、水と火が順番になっているのは、インド的な物質観で、硬くて粗大なものである地から、しだいに軽くて微細なものものにかわるという系列にもとづくものです。儀礼から説明するのは困難なようです。

**サンスクリット語では「対象に依存する＝尊敬」を意味するということなんでしょうか？それに、闍伽水・洗足水が尊敬され、口漱水・洒浄水が尊敬されない どこで区別するのもよくわかりません。**

説明が不十分だったようです。闍伽水、洗足水という名称は、「尊敬に値する（人に捧げる水）」や「御足（に捧げる水）」という意味で、いずれも水を奉獻する対象を指しています。それに対して、口漱水は「口や手をすすぐ（水）」、「散布する（水）」という意味で、水を用いて行う行為を指す言葉です。アルガの儀礼で用いられる水に、奉獻する対象（たとえば神）に向けられる水と、奉獻する者自身（つまり儀礼をする人）を浄める水の2種があり、その名称がこの違いに対応しているということです。水を用いて行う「口をすすぐこと」「水をまいて浄めること」は、対象を限定する言葉ではなく、動作という中立的な言葉であるということもできます。

## 6. 儀礼による宇宙の開闢：建築儀礼とマンダラ制作儀礼

敬愛の修法の話を知っていると、密教（というか仏教）の儀礼であるのに、ずいぶん俗世的な願望のためのものなんだなと思いました。もっと聖なるものだと思っていたので…。こうした俗世的な願望をかなえるためのものなのに、何もとがめられないというか、禁止されないのはなぜなのでしょう。願望、つまり欲そのものが否定されそうなものだと思ったのですが…。

おそらく皆さんが同じような疑問を持ったでしょう。性行為や殺生を禁じる仏教が、どうして、そ

れを儀礼の力で実現させたり、促進したりするのか不思議です。いろいろな説明が可能と思いますが、たとえば、あらゆる宗教は、このような世俗的な願望成就に対応できる要素をそなえているというのが、もっとも基本的なところでしょう。とくに、仏教やキリスト教のように、長い歴史を持ち、広い範囲で信仰されている宗教は、高度な哲学や教理とともに、このような現実的な問題を対処するメカニズムを持っています。また、儀礼が多義的に解釈され、たとえば護摩の火を焚くこと

は「煩惱を焼き尽くすため」という仏教的な解釈を、現実的な願望と重ね合わせることもあります。仏教ではこれを「世間的」「出世間的」と区別します。さらに、日本の密教の場合、空海によって導入されたときから、国家のため、もっと言えば、天皇のための宗教でした。そのために儀礼も遂行するのですから、世継ぎの誕生を祈ることも、天皇の不老長寿を祈ることも、密教にはじめから課せられていました。加持祈禱というのは単なるおまじないではなく、国家にとって最重要の仕事のひとつです。したがってそのための知識（つまり、儀礼の方法や呪文など）は、最高機密事項です

**降伏のような、人に害を与える護摩に対して、害を受ける人は対抗する手段があるのでしょうか。また、護摩による効能はすべてアグニによって行われていると考えてよいのでしょうか。**

密教のこのような儀礼のことを「修法」とよびますが、調伏などの呪に対して、それをはね返すような修法もあります。有名なものでは、雨乞いの儀礼（請雨法といいます）を行ったときに、それを妨害するために、逆の結果をもたらす修法（止雨法）をライバルの僧侶がこっそり行ったことが、記録にも残っています。このような儀礼の効果のことを「験」（げん）と言いますが、「験を競う」という状況です。護摩の効能は、日本ではむしろ、本尊である不動明王に帰せられることが一般です。不動への信仰が日本密教でとりわけ重要であるのは、人びとの願望に応える代表的な仏だったからです。

星座の話が気になりました。現在ある星座（星占いなどのもの）は、ヨーロッパから来たものであって、日本において星と関係することと言ったら、星をつなげる星座というより、むしろひとつひとつの星を見ていたと思っていました。彗星とか。でも、日本でも星座というとならえ方は昔からあって、それは中国、インドなどから伝来したものとことなののでしょうか。それとも、日本の星座、欧州の星座（現代日本の星座）、インドの星座はまったく別なのですか。

星座は護摩のときの祈願の対象として言及しましたが、いずれも同じあたりに起源があります。ヴェーダの祭式のときにも触れましたが、インドでは古くから天文学や占星術が発達した国で、これと同系列の学問がアラビアにもあります。ヨーロッパの占星術はこのアラビアの知識を継承したもので、結果的には、日本に伝わる古い占星術と同じものになったのです。もちろん、日本で現在一般的に行われている星占いは、明治以降にヨーロッパからもたらされたものですが、古い時代に日本に占星術が導入されたのは密教を通してで、とくに「宿曜道」とよばれます。平安時代はこの宿曜道と陰陽道が人びとの生活を決定づけていました。平安貴族たちも、私たちと同じように、生まれた日の星座などから、運勢を占い、それにあわせて行動をしていたのです。密教の曼荼羅に「星曼荼羅」というのがあり、先日まで開催されていた「法隆寺展」にも有名な作品が来ていましたが、そこにも、牡羊座や乙女座などの絵が描いてあって、気がついた人はびっくりしていました。また、最近の星占いでは、この宿曜道に基づいたものもときどき見かけます。

**護摩の儀礼のところで、櫛を使うのはなぜなのでしょう。降伏では毒を使うなどということがありましたが、たしか、櫛にも毒があったと思うのですが、それは何か関係があるのでしょうか。また、左右逆にするというのは、私は着物の着方を思い出しました。生者は左前、使者は右前と区別していると思いますが、そうしたことは関係しないのでしょうか。**

櫛については私はほとんど知識を持っていません。たしかに宗教と結びついた植物で、葬儀のときにも櫛の「花輪」が飾られることなどがあげられます。密教でも灌頂の中に投華得仏という重要なプロセスがありますが、そこで灌頂の受者は櫛を手にして、マンダラにそれを投げます。インドでは花なのですが、日本では櫛を使います。その他、閻伽器の水の中にも櫛を入れます。左と右の対立は、ご指摘のとおりで、右に対して左がネガティブな性格を帯びているため、意図的に逆転させて

左を用いるのです。これは、黒魔術によく見られる方法です。

護摩の火はどうやって火を付けるのでしょうか。チャッカマンだったら、興ざめですが…。宗教的空間の話をされていましたが、それでふと思出したのが、ドイツの Dom (大聖堂) です。天井が高く、ステンドグラスに光が差していて、当時のキリスト教の権力の強さを見せつけられると同時に、神がそこにいるのかなと畏れ多くなりました。キリスト教徒ではありませんが、不思議とそんな気分になります。

古代のインドでは護摩の火は火元がきまっていたようですが、火おこしの木を使って、儀礼の一部として発火させることもあるようです (ウルヴァーシーとブルーラヴァスの物語で紹介しました)。日本の護摩ではどうなのでしょうね。私もよくわかりませんが、なにかきまった手続きがあるのでしよう (儀軌などで調べてみます)。宗教的空間として、キリスト教の大聖堂は好例です。仏教の大伽藍でも感じるでしょう。新興宗教でも、巨大建造物を造ることが多いのですが、それも、このような既存の宗教が持っている「宗教的空間」の演出にならったもので、信者に対してきわめて効果的です。まったく違う文脈ですが、全体主義国家で巨大な空間を舞台に大衆を動員したイベントを行い、国家や権力者への忠誠心を生み出すのも、同じ手法でしょう。ナチスドイツのベルリン・オリンピック、日本の皇居前広場、北朝鮮の軍事パレードなどです。

護摩がインドからどのように日本に伝わったか、もう一度復習して欲しい。

インドから日本に伝わったルートなどには言及しませんでしたので、簡単にまとめておきます。もともとヴェーダ祭式の基本的な儀礼であった火の儀礼ホーマは、ヒンドゥー教でも継承されますが、中世のインドでは本来の宇宙論的な意味は失い、火天に対する供養 (プージャー) と、それによってもたらされる現世利益が中心となります。密教はこれを踏襲して、仏教的な意味づけも与えて、

基本的な密教儀礼のひとつとしました。それが中国密教に伝えられ、さらに空海によって日本に伝えられたと言われています。インド密教にも護摩儀礼に関する文献がいくつか残っていて、それを日本の護摩とくらべると、かなり共通部分があることがわかります。しかし、本尊として不動明王を祀ることをはじめ、相違点もあり、どこで変化したかが興味深いところです。中国密教の実態があまり明らかではないので、明確にはできないのですが。

前に仏教文化論で、スライドを見せてもらったときに、マンダラが出てきて、先生がちらっと「マンダラは神様の家です」と言っていたのに、すごく興味を持っていました。マンダラって丸いのや四角形がありますが、あれは意味的に何か違うのですか。「家」に神様そのものが描かれているのも不思議だなと思うのですが。

「マンダラは仏たちの家」というのは、私の書いたものに頻繁に出てきます。構造的にもそうですし、これから授業で取り上げるように、制作のプロセスも建築儀礼を用いますので、明らかに家として意識していたことがわかります。丸と四角の形から言えば、四角い方が家の外郭を表します。丸はそれを囲む大きな丸と、四角の中にある小さな丸がありますが、前者が宇宙全体を表し、後者は仏たちが上にのる月輪や蓮華を表します。丸や四角が好まれるのは、インドの宇宙観が基本的に幾何学的だからです。マンダラについては、前回の資料にあげた私の『マンダラ事典』が入門書としては便利ですし、少し詳しくは『マンダラの密教儀礼』がおすすめです。

私たちの一番、身近な宗教的空間が家だと聞いて驚きました。たしかに、実家には仏壇もあるし、宗教的だとは思いますが、しかし、それしか思いつきません。他にどのようなところが宗教的なのでしょう。

家が宗教的空間と聞くと、たしかに少し変な感じがするかもしれませんが。仏壇や神棚があるからというのも、その理由とはなりませんが、私自身は、

すべての家というものは、宗教的空間（あるいは聖なる空間）だと思っています。これについては、今回お話ししますが、それをとくに意識するのが、建築儀礼なのです。宗教的といっても、神や仏が宿っているというだけではなく、人間にとって何らかの意味を持った構造を持つという程度です。でもそこに、宗教的空間の基本的な性格があります。

・全体の流れは変えず、儀礼に用いる道具を変更することで、儀礼の目的が異なるものになるという話を聞き、儀礼において、道具は重要な位置を占めているのではないかと思いました。道具にヴェーダ祭式の名残があるのも、道具が重要なものとされてきた結果なのだろうかと思います。

・護摩の道具で、古代インドでは油を供物にしたという点に興味を引かれました。やはり「火」を使い、「火天」を招くといったことと関連があるのでしょうか。また、儀礼で用いられるものの形もおもしろく、そこにも何らかの意味があるのだろうかという疑問に思いました。たとえば、清めの水が散杖という2本の箸を軽くしめらせ、炉の口をたたくというものでしたが、なぜ、ひしゃくのようなものではいけないのかといったようなことです。儀礼において、それに関するものは必ず何らかの意味を持つのだろうと私は考えているので、そういったことも詳しく知れるとうれしいです。

類似のコメントだったので、まとめて紹介しました。儀礼の道具は儀礼を考察するときの重要な要素になると、私も思います。何か意味がある場合は、できるだけ紹介するようにしますが、必ずしも常に意味があるわけではないのも事実です。たとえば、大杓の形がひょうたん型をしていることをお話ししましたが、密教儀礼としてはとくに意味は与えられていないでしょう。何か仏教的な意味づけが与えられているかもしれませんが、それはこじつけのこともあります。あくまでも、伝統

の中で受け継がれた形でしかないことの方が多いです。しかし、それでもヴェーダ祭式に由来するという、別のレベルの意味は確認できます。はじめの頃にも言いましたが、儀礼に意味を求めすぎると、解釈が恣意的になる危険があります。儀礼を行っている人が考えてもいない意味や、何ら根拠のない推量にも続く意味を、ひねり出すこともめづらしくないからです。少なくとも、儀礼を行っている人が自覚している意味、歴史的な知識としてわれわれがたどることのできる意味、そして、ある程度、客観的に認められる普遍的な意味といった、レベルの違いを意識する必要があります。人類学に「エティック」と「エミック」という用語がありますが、これに似ています。

ヴェーディのように、必要なくなったにもかかわらず、残り続けているものがあるということが、考えてみると不思議でした。生物の進化では、普通、必要ないものは淘汰されていくと思うのですが、それでも、依然として進化は不完全だということに似ていると思います。むしろ、完全な進化を遂げたら、生物の多様性すらなくなってしまいうすす…進化の不完全さや名残があるから、いいんだと思いました。

たしかに、儀礼は進化に似ています。実際、私のよく知ってるヴェーダの儀礼研究者は、インドの儀礼の変遷を、進化の系図（生物の教科書などによくありますね）のように描くことをめざしています。私自身は、必要ないものが残ることに興味を覚えます。儀礼というのは「形式」が尊重されるので、すでに意味を失ったり、他の意味を持つようになって、さまざまな形式は残ります。そこに、儀礼の歴史や変化を読み取ることができると考えています。生物の多様性がなくなったら、たしかにつまらない世界になってしまうでしょうね。

## 7. 神話世界の再現：仏伝から密教儀礼へ

マンダラがあんなに大きくて、カラーで細かいものだったとは…。驚きました。お寺や博物館で見かける仏具が、何のためのものなのか、今日はじめてわかりました。金剛杵って武器だったんですね…。明王に対して、ヒンドゥー系の神を仮想敵国のようにしてあてがっているのがおもしろかったです。ところで、ヒンドゥー系から文句は来なかったのでしょうか。マンダラを描くのは砂だけですか。

マンダラにはさまざまな種類があります。日本では仏画の一種としてとらえられています。立体的に表したのもわずかに伝わっています（那智から出土したものが有名です）。砂マンダラの伝統は伝わっていません。今回取り上げる灌頂では、敷曼荼羅といって、上からつるすのではなく、床に広げるマンダラが登場しますが、これが砂マンダラの代わりになります。チベットでは壁画のマンダラもたくさんあります。木や金属で作った立体マンダラもありますが、中国の影響で作られたのではないかと考えています。もともと、マンダラは立体にする必要のない設計図なので、わざわざ立体にすると、かんじんの中身が見えなくなってしまいます。ヒンドゥー教の神の扱いは、密教の仏の世界を考える上で重要です。単なる悪役ではなく、随時、仏教の都合のよいようにあつかわれます。たとえば、マンダラでは一番外側のエリアが、ヒンドゥー教の神々に当てられることが多いのですが、マンダラの歴史を通してみると、中央の仏教の仏がつつぎつつぎと入れ替わっているのに対し、このヒンドゥー教の神々はほとんどかわりません。影の主役のような存在なのです。ヒンドゥー教徒にとっては、自分たちの神がないがしろにされているのを見るのは、もちろん、不快だったでしょうが、当時のインドでは、すでに仏教に対してヒンドゥー教は圧倒的な勢力を確立していたので、おそらく相手にされていなかったのではないかと思います。ヒンドゥー教から見れば、仏

教も「少し変わったヒンドゥー教」程度にしか見えなかったかもしれません。

日常的な空間に聖なる空間は存在し続けられないということですが、では「家」というのはどうなるのでしょうか。家が聖なる空間のもっとも身近なものであるということは、はじめから言われていましたが、それと共に、家は日常的な空間でもあることは間違いないと思うのですが。

そのとおりですが、常に家が「特別な空間」であるという意識は消えないのではないかと思います。それとともに、聖なる空間があるように「聖なる時間」もあります。1年や一生という時間が、宗教的に均質ではないことは、空間と同様です。お正月やお盆はそのわかりやすい例でしょう（最近はどうでもないかもしれませんが）。葬儀も当然そうで、かつて、家で葬儀を行っていたときは、そのことが強く認識されていたはずですが。その期間は、家が「俗なる空間」から「聖なる空間」へと転換しているのです。逆に言えば、セレモニーセンターなどに葬儀をゆだねるようになった現代は、家という宗教的な空間が持っていた意味を、人びとが見失いつつある時代なのでしょう。「日常的な空間に聖なる空間は存在し続けられない」と同じように、つねに聖なる時間が持続することもあり得ません。葬儀の場合、その区切りになるのが初七日や四十九日の法要で、それによって、聖なる時間と俗なる時間が分断されるのです。日本民俗学では、このような構造を「ハレ、ケ、ケガレ」という概念でとらえることが多いようです。

マンダラ制作の流れで、ヴァーストゥナーガと大地の女神が出てきましたが、ヴァーストゥナーガつまり龍も一種の神獣ですが、このふたつの神の関係はいったいどういう関係なんですか。ふたつの神が大地にいて、その両方に請いをたててから、マンダラ制作に取りかかっているわけですが…。

儀礼のおもしろいのは、はじめから合理的につじつまが合うようにはできていないところだと思います。合理的なプレゼンテーションとしてできているわけではありませんので、無意味な行為や相互に矛盾する要素、冗長であったり重複する部分も、いくらでも含まれます。「はじめに行為ありき」の世界であり、それだからこそ、儀礼の起源や形成、意図などが読み取れるのです。ヴァーストゥナーガと大地の女神についても同様で、おそらく、大地や建築儀礼に関する異なる伝統がひとつにまとめられて、仏教の建築儀礼（マンダラ制作儀礼）はできあがったと考えられます。このうち、大地の女神は釈迦自身の降魔成道とも関連しますし、おそらく、インドの建築儀礼一般に見られる司祭と大地の女神の「聖婚」ともつながりがあると思います。ヒンドゥー教建築儀礼に見られたヴァーストゥブルシャと神々の碁盤目も同様で、それをひとつにまとめたために、カオス＝ヴァーストゥブルシャに対するコスモス＝神々の征服神話という「合理的な」説明が与えられたのでしょうか。

小学五年の時、宿泊学習で富山県立山町の「マンダラ遊園」というところへ行ったことを思い出した。昔のことなので、何があったか覚えていないが、「マンダラ」と聞くと、この遊園を思い出してしまう。あのころはたしか「あの世とこの世」がテーマのようで、先のない吊り橋や、転生への道みtainな迷路があって、講義のような神、仏は一切なかった。あの場所は何だったんだろう…。富山県出身の皆さんは、たいてい、高校までのどこかの段階で立山博物館とその付属施設であるマンダラ遊園などを訪れているようで、とてもいいことだと思います。富山県〔立山博物館〕は、私も何度か訪れたことがあります。よくできた博物館です。主任学芸員の福江さんは、立山曼荼羅研究の第一人者で、詳しい展示があります。この立山曼荼羅ですが、代表的な社寺参詣曼荼羅です。立山信仰や立山登拝に関するさまざまなモチーフで構成されています。マンダラ遊園も、このような立山曼荼羅の思想を実際に疑似体験できるよ

に、できています。その内容が「あの世とこの世」であるのは、立山が一種の地獄としてとらえられ、「地獄めぐり」の性格があるからです。私の授業で取り上げるマンダラとまったく違い、神や仏がないというのは、重要な指摘です。日本のマンダラは、本来の密教の「仏の世界」から、われわれを含む人びとの生活空間に、その基本的な性格を変えてしまっているからです。その背景には日本人の「聖なる空間」のとらえ方が深く関係しています。立山マンダラについては『マンダラ事典』で項目をひとつ立てています。また、「日本人はマンダラをどのように見てきたか」『点から線へ』50: 78-102 (2007) という文章で、そのあたりを含めて詳しく説明しています。

マンダラを壊して川に流すということに興味を覚えました。マンダラは一度作ったらずっと残しておくものだろうと考えていたからです。「聖なるものは俗なる場所にずっとあり続けられない」と先生がおっしゃっていて、私ははじめ、「聖なるもの」とは、マンダラに宿った神だと思ったので、神だけを帰せばいいのではないかと考えました。しかし、そうではなく、「マンダラ」自体を壊して砂を川に流すのなら、神の宿ったマンダラ自体が「聖」のものであるのだろうと感じられました。では、そのマンダラを作った空間も、そのような儀礼が行われたことで「聖」と認識されると思うのですが、その空間には、何か特別な措置はされないのでしょうか。

たしかに、マンダラは「私たちの家」という「単なる容れ物」なのですが、それと同時に儀礼の装置でもあります。古代のヴェーダ祭式以来、儀礼の装置は聖なる空間としての意味を持ち、しばしば宇宙全体と重ね合わされます。宇宙の創造が儀礼の始まりであるとする、その聖なる空間そのものを俗なる空間に戻す儀礼で、全体を締めくくる必要があります。もし、そのまま放置したら、日常的な俗なる世界にもどってこられなくなります。また、次に儀礼を行うときに、宇宙の創造をはじめられません。おそらく、儀礼空間に関するそのような考え方が、インドでは一貫としてあ

たのではないかと思います。なお、授業では言及しませんでした。インドのマンダラ制作儀礼では、キーラ（例の金属製の杭のことです）を抜くという作法が、儀礼の最後にあります。これによって結界がほどかれ、マンダラを含む聖なる空間が解消することになります。ご質問にある「特別な措置」に相当します。

- ・昔の商家の結界は、木製の格子で直角をなし、内側に机（その上に算盤、筆）を置き、外側に大福帳を下げます。寺院も内陣は聖（僧）、外陣は俗（一般）と分けられ、一般人は内陣へ入れません。

- ・民俗学の方になりますが、石川県では上棟の際、棟梁（大工頭）が棟木に塩鮭をぶら下げます。（工事中、当然腐ってくるので、いまはビニール袋に入れます）。大工工事完了のとき、その鯖を降ろし、サバオロシと言って、酒宴が行われます。なぜ、鯖なのか知りませんが…。

- ・鬼門の考えは中国から来たとかで、秋（天高く馬肥ゆる）になると匈奴が毎年、北東から侵略してくるので、その方向を鬼門と呼んだとか。馬肥ゆるは匈奴の馬、それを防ぐため、万里の長城が作られました。

- ・現在、北東に便所等を作った場合、鬼門封じとして、赤南天、白南天の木を夫婦（めおと）として、敷地の北東に並べて植えます。難を転ずるの

意。

- ・古い家の井戸を埋めるときは、残土は使わず、山砂などの清浄な土で埋め、必ず、井戸の神が呼吸できるようにパイプを入れ、地表まで伸ばしておきます。便槽を埋めるときも、陶器屋さんから焼き物の男神と女神を買ってきて、奉書紙に向き合いで包み、紅白の水引でしばり、底に安置します。埋めるときは、清浄な砂を用います。井戸も便所も、必ず酒と塩で清めてから埋めます。

- ・「儀礼としての寺院建立」にあった胎児の話ですが、日本の地鎮祭の場合、祭り終了時に神職が土器（かわらけ）の皿二枚の中に五色の色紙を切ったもの、麻糸を刻んだもの、真鍮の薄板（金色）で作った剣、貨幣などを入れ、奉書紙で包み、紅白の水引でしばったものを建設業者に手渡し、基礎の東北角に埋め込むように言います。インドと似ています。

たくさん情報をありがとうございました。日本の建築儀礼もいろいろあっておもしろいですね。とくに、便所や井戸の埋める作法などは、いろいろな要素が入り込んでいるようです。地鎮祭で埋める作法は、おそらく古くから行われてきた鎮壇作法で、インド以来の鎮壇具が姿を変えたものと思います。建築に関わるこれらの儀礼は、石川県特有の地域的なものもあると思いますが、かなりは全国共通ではないかとも思います。詳しく調べられるといいですね。

## 8. 聖別の儀礼：灌頂儀礼と完成式

話がむずかしくなってきました。灌頂で水を浴びることによって、弟子が本当の仏になるということですが、「仏」の概念がよくわかりません。「仏」は複数いるものなのですか。また、春ごろにお釈迦様に水をかける行事があったと思うのですが、灌頂が関係あるのかなとよくわからないなりに思いました。

「仏」とは悟った存在で、もちろんお釈迦さんがそうですが、大乘仏教の時代になると釈迦以外に

も多くの仏が現れます。その先駆的な発想は、大乘仏教以前の古い時代にもあり、とくに、釈迦よりも前の過去仏、弥勒に代表される未来仏という、時間軸上の多数の仏たちへの信仰がありました。この場合も、仏はつぎつぎと継承される王のようなイメージがあります。大乘仏教になると、この世界以外にも別の仏国土をたて、それぞれに仏がいると考えるようになります。極楽浄土の阿弥陀はその代表で、西方の仏国土にいます。世界は無

数の仏の国土で満ちあふれ、それぞれで仏が法を説いているという記述が、多くの大乘経典に登場します。密教や灌頂の仏も、基本的にはこのような「おおぜいの仏」を前提にしています。そして、特定の世界で仏が現れるときには、それ以外のすべての仏たちがそこに集まり、新しい仏に灌頂を授けるという考え方が見られます。密教の場合、さらにそれらのすべての仏の根源的な存在として、大日如来という超越的な仏を立てるため、すべての仏が大日如来と同一であり、新たに仏になるものも、自分自身が大日如来であることを悟るというプロセスが見られます。灌頂儀礼では弟子がこの「新たな仏」に相当し、阿闍梨がすべての仏であり、大日如来なのです。むずかしいかもしれませんが、密教はこういう発想をします。春にお釈迦さんに甘茶（おそらく水ではなく）をかけるのは、前回紹介した釈迦の誕生直後の灌水に由来します。お釈迦さんの誕生日のお祭りは花祭りという名で知られていますが、正式には灌仏会（かんぶつえ）と言い、この灌水を儀礼の中心に置いています。灌仏会の儀礼自体は密教儀礼ではありませんが、密教の灌頂のモデルとして、この灌水のエピソードを想定していることは、授業で紹介したとおりです。

雨が仏の知恵を表すというのは面白いです。水と知というのは、何か他にも見られる組み合わせですか。北欧の知恵の泉くらいしか浮かびませんが、菩薩や明王といった称号がどのような順で上位になっていくのでしょうか。そういったものがまとめてあると話がわかりやすいような。

雨がさまざまなものをもたらすという考え方は、世界中にいろいろあると思いますが、インドの場合は、以前にも紹介したように、「天上の水」という考え方が重要でしょう。われわれの世界にある「物質としての水」とは異なり、神々の世界である天上は、命ある水で満たされ、これが甘露と呼ばれます。甘露というのは甘い水という意味ではなく、これを飲めば永遠の命が得られる不死の水です。この甘露がわれわれの世界に現れる姿が、雨です。インドでは雨は生命をもたらすふしぎな

物質です（実際、雨によってさまざまな作物が生育します）。水をかけることによって再生がはかれるのも、キリスト教の洗礼をはじめ、珍しくありませんが、インドの場合、それが神話のレベルでも明瞭に意識されている点に特徴があります。これまでに紹介した閻伽水やプージャーにおける水も、どこか共通の要素をもっていると思います。仏の世界のヒエラルキーについては、私の『インド密教の仏たち』や、佐和隆研『仏像図典』などを参照していただければいいのですが、基本的に、仏は悟った存在、菩薩はそれにいたるまでの修行途上の存在、明王は仏が怒りの姿を取った存在、天は外教の神が起源で、護法の役割をする存在という程度で理解しておいてください。

アビシェーカは立太子の儀式も含むと言っていたけれど、インドでは王様は世襲制ではないのですか？王の長男がなるとか、そういうのではなく、候補者がたくさんいて、選挙のような形で選ばれるということでしょうか。あるいは、次王ははじめからきまっているけれど、形式的に式を行うのでしょうか。灌頂に用いる水はどこから取ってくるんですか。水道水ではないですよ。井戸水とか、山まで採りに行くのでしょうか。

インドの王位継承も、他の地域と同様、さまざまな形があったでしょう。スムーズに世襲されたこともあれば、一族のあいだで骨肉の争いがあったり、家臣や隣国の王による王位篡奪の戦争も頻繁に起こりました。まったく新しい王朝が確立したことも、何度もありました。現国王が存命中に、次期の国王を定め、それを人々に周知する立太子の式は、おそらく、最も重要な国家行事のひとつだったでしょう。たとえそれを行ったとしても、皇太子とは別の者によって王位が奪われることも珍しくなかったと思われま。家臣による合議はあったでしょうが、選挙はしなかったでしょうね。灌頂の水の出所は、私もあまり気にしていませんでしたが、文献を見ても明記してありません。閻伽水をとる井戸から汲んだりしたかと思いますが、儀礼の中で、そこに神々をとけ込ませたり、天上を流れる神話上の川（マンダーキニー川といいま

す)の水と同一であることを瞑想したりすることで、特別な水にするようです。今ならば、水道の水を使うかもしれません。山まで採りに行くというのは、ミネラルウォーターのような発想ですが、インドの山は日本と違って、地下水が湧いているようなところはあまりないでしょう。

釈迦仏伝図の際、インドでは両側からかけるというのが共通認識と先生はおっしゃっていましたが、それにも何か意味があるのですか。今回は灌頂を定説から見るのではなく、次の仏として周知させるための儀式だという話が面白かったです。また、儀礼の内容も興味深く、いろいろな道具が使われるのだという点も興味深く感じました。金篋は本来、眼医者道具だったということは意外でした。仏教とはあまり関係がなさそうなのにと、たいへん、不思議です。何か由来があるのでしょうか。また、他にもそのように本来は仏教とは関係のない使われ方をしていた道具も存在するのですか。

インドでは仏教がすでに失われているので、灌頂の儀礼を見ることができません。日本密教で行われている灌頂は、おそらくインドのそれを忠実に受け継ぐものようですが、オープンではないので、私自身は見たことがありません。そういうわけで、灌頂の作法は私には謎なのですが、文献によれば、阿闍梨が弟子に水瓶の水をわずかずかけるといふ記述があるので、水をかけるのは阿闍梨ひとりだと思っています。これに対し、『過去因果経』の絵巻物やアジャンタ石窟の壁画にある王の即位灌頂では、左右から二人の人物が壺から水をかけている様子が描かれ、どうも密教とは違うようなので、授業では強調しました。同じように二人で水をかける作法は、インドやネパールのプラティシュター(今回取り上げます)でも行われるようなので、その形式を表したのではと思います。王の即位式が密教の灌頂儀礼の直接の起源ではないことも、ひょっとすると、このような作法のレベルでも説明できるかもしれません。金篋は面白い道具だと思います。眼科医の道具としばしば説明されますが、これはたとえばインドの医学書などでは確認していません。むしろ、仏像な

どの開眼作法の時に、像の目を開く作法の時に用いる道具だったのではないかと思っています。前に取り上げたキーラもそうですが、私は儀礼の道具にも関心があり、それが仏教以外の場面で用いられていたときの意味が、仏教でも継承されていることが多いと感じています。

キリスト教の儀式にも洗礼という水を使ったものがありますが、あの儀式には体を水で清めることによって新たな性を与えるという意味があったと思いますが、灌頂儀礼にも「蘇生」という言葉があるように、灌頂を受けた者に新たな生を与えるという意味がありそうですが、どうなのでしょう。そのとおりだと思います。私も『マンダラの密教儀礼』の中で灌頂をあつかった章では、まず、水を使った再生儀礼の代表としてキリスト教の洗礼を取り上げ、それと同じ機能であるという話の流れにしました。水による清めと再生は、おそらく水を用いた儀礼としてはもっとも一般的なものでしょう。釈迦の誕生の直後の灌水も、この「新たな生」を明確に示すための手続きだったと思います。キリスト教の洗礼は、もともとはユダヤの民のイニシエーションの儀礼だったようで、キリスト自身も洗礼者ヨハネによって洗礼を受けます。その姿はピエロ・デッラ・フランチェスカの絵(ロンドンのナショナルギャラリー所蔵「キリストの洗礼」)のようなイメージで知られていますが、古い時代は川に首までつかったようなものもあります。お風呂に入っているような感じです。

灌頂儀礼を見ていて面白いと思った。たとえば「儀式とマンダラについて口外の禁止」があったが、研究者には知ることのできない口伝のみの何かがあるものなのだろうか。「明鏡」の言葉を見て「明鏡止水」を思い出した。灌頂は水を使うので、ぴったり?と調べてみたら、荘子の言葉のようなので関係なかったが…。仏教は何についてもすごい数の儀式があるように思う。キリスト・イスラムにはなさそう。

口外の禁止は、灌頂儀礼の中では、弟子がマンダラを見る前や儀式を始めるときに、阿闍梨から弟

子に指示され、それを破ると「地獄に墮ちるであろう」と言われます。これを「越三昧耶」（おつさんまや）とも言い、誓いを意味する「三昧耶」を越えてしまう、つまり破ってしまうことを意味します。このことは、密教儀礼の詳細が一般に知られることを防ぐ役割をしました。灌頂を受けた者にしか灌頂の内容は分からないのですが、それを人に話してしまえば、誓いを破ることになるので、公表できないのです。私は灌頂やマンダラのことをあちこちに書いたり、授業で話したりしていますが、これも、灌頂を受けた者ではないからできることです。そのため、実際に体験したことではなく、文献の記述から読み取って、ある程度、推測もまじえた内容になりますが、私の使っているインドの文献には比較的、細かく記述してあるので、かなりの内容がわかります。文献の威力です。ところで、最後にあるように、授業を聞いていると仏教に儀礼の数が極端に多いような印象を受けるかもしれませんが、おそらくキリスト教やイスラム教でも同じ程度はあるでしょう。日本でも平安時代の有職故実の世界は、直接宗教と関係しませんが、おそろしく細かいことまで規定されています。

**ダライラマが灌頂を行うということが本に書かれていましたが、灌頂は相当の位の高い人に行えないものなのですか。人を仏にするには、その人がかなり高位でないといけない気がしたので。**  
たしかに、日本密教でも灌頂を行うことのできる阿闍梨は、かなり高位の僧侶です。文献にも、そのような阿闍梨がそなえている資格や資質が細かく記されています。ダライラマは観音の化身で、この世に現れた仏なので（少なくともチベット仏教の立場ではそうです）、灌頂をするのに適任でしょう。灌頂にはいくつか種類があり、在家の人

でも受けることのできる結縁灌頂というのは、与える方もそれほど高位の僧侶を必要としません。授業で紹介している灌頂は、それよりもレベルの高い灌頂で、日本では伝法灌頂といいます。

**シヴァとその妻とっていましたが（最初の降三世明王のところで）妻ってどの妻でしょうか。シヴァの妻はシヴァの感情を表すものとして、場面によって別の神になると聞きましたが。パールヴァティーでいいのでしょうか？それともあのアマゾネスみたいな女神？どれが妻なのか、というかどの妻なのか気になります。明鏡の鏡って、ものがうつるのでしょうか。なんかくすんで見えたのですが…。ホラ貝は悪いものじゃないですよ。西洋では戦争の合図だし、たぶん、ほらを吹くが悪い意味なのは日本くらい？**

シヴァの妻には正妻？のパールヴァティーの他に、ライオンにのった武勇神のドゥルガー（アマゾネスはこれのこと？）、そして、シヴァを足の下に踏んで立つカーリーが有名です。その他に、ウマーという名前と呼ばれる女神もいて、一般にパールヴァティーと同一視されます。降三世明王の足の下の子は、このウマーで、烏摩妃と書きます。これらの女神たちはいずれも、もともとは別の女神だったようですが、シヴァ信仰の隆盛と、女神信仰の流行を背景に、シヴァの妻として統合されていったのです。「シヴァの感情を表す云々」というのは、後世の人の説明でしょう。明鏡の鏡は、実際、あまりうつらないようです。見えなくても見えるように振る舞うのも儀礼だからでしょう。前回省略したスライドにも明鏡は含まれますが、そちらはもっとうつらないようです。ホラ貝はそれとおりです。日本では修験道でしばしば用いられます。

## 9. 人生という円環：人生儀礼と通過儀礼

グリヒヤーストラの儀礼変容を見ると、生の循環から祖霊の供養へと儀礼が姿を変え、さまざまな儀礼が追加されたりしている。儀礼は神代に完成されたような「神の儀式」ではなく、人びとの信仰や営みによって変化する人間的な性質を持っているようでもしろいと思った。

授業で紹介したグリヒヤーストラは、『アーシュヴァラーヤナ・グリヒヤーストラ』という名の文献で、比較的古い成立のもののように見えます。以前に配布した「ヴェーダ文献一覧表」を見ると、リグヴェーダの系列のグリヒヤーストラであることがわかります。グリヒヤーストラの内容が「人間的」であるのは、扱っている儀礼が「グリヒヤ」すなわち家庭内祭式であるからです。グリヒヤと対になるのが「シュラウタ」です。こちらは、三種の祭火を用いる大規模な儀礼で、王権や国家と結びついた儀礼です。国王即位儀礼としてのアビシェーカ（灌頂）も、代表的なシュラウタ祭式なのですが、グリヒヤのジャンルに属する人生儀礼（サンスカーラ）と一緒に、さらに、プラティシュターという新しいタイプの儀礼もこれに関わるところが、おもしろいと思います。プラティシュターは寺院や神像が現れるようになって成立した儀礼で、シュラウタには取り上げられず、グリヒヤーストラの中でも新しい層の文献にしか登場しません。シュラウタ祭式は寺院や神像を前提としない祭式だからです。儀礼の変化や追加は、必然性があることで、その背景にあるのは、ご指摘のように人びとの信仰や営みであり、そこを読み解くことが儀礼研究のおもしろさだと思います。

現在、私たちが行っている通過儀礼には、地域によってさまざまな違いが見られると思うのですが、グリヒヤーストラの場合、どうだったのでしょうか。変容は起きて、違いは生まれなかったのでしょうか。それとも、グリヒヤーストラ自体が狭い世

界で行われていて、違いの生まれようもなかったのでしょうか。

伝統的なインドの儀礼も地域によってかなり異なります。現在の例ですが、一般に南インドの方が伝統的な儀礼世界がよく残っているとされます。それとともに、インドの儀礼文献は、ヴェーダの体系にしたがっているため、4つのヴェーダ（さらにその中の分派）がそれぞれの文献を有しているという特徴があります。グリヒヤーストラもそれぞれの学派が固有の文献を持っていますし、シュラウターストラも、法典（ダルマシャーストラ）も同様です。授業で紹介したアーシュヴァラーヤナ・グリヒヤーストラも、マヌ法典もそのうちのひとつの例にすぎません。パワーポイントで紹介したグリヒヤーストラの変容は、数あるグリヒヤーストラの内容を網羅的に取り上げ、内容を比較した結果です（この分野の日本の第一人者である永ノ尾信悟氏の研究）。そこでは、個々のグリヒヤーストラが成立した時代の状況が反映されています。さらに、グリヒヤーストラには、少し遅れて「補遺文献」（バリシシュタ）というジャンルが生まれます。現在のヒンドゥー教の儀礼は、このグリヒヤーストラ補遺文献の成立と密接に関わっているとされます。

ネパールでは女子の初潮でも儀礼をすることがなかった。日本だったら母親や女友達にしか言いたくないことでも、儀礼をするということは、宗教によってもそういうできごとのとらえ方が違うものなのだなと思った。

初潮儀礼はネパールに固有の通過儀礼ではありません。意外に思うかもしれませんが、世界中の通過儀礼でもっとも一般的なもののひとつでしょう。かつての日本でもそうでしたし、今でもその片鱗が残る地域や共同体などもかなりあるはずですが。通過儀礼は出産や葬儀のように生と死に関わることが多い儀礼です。生は性とも関連しますので、

結婚や割礼も重要な通過儀礼で、初潮もそれに加えられます。通過儀礼のもうひとつの特徴は、しばしば「死と再生」のモチーフをとまなうことです。成人式にあたるイニシエーションで、しばしば「擬似的な死」を体験し、あらたな誕生がその後に行われます。「擬似的な死」はさまざまな試練や、母胎をイメージした空間にとどまることなどで、象徴的に示されます。この「死と再生」も「生と死」と重なることがわかります。通過儀礼については、参考文献のファン・ヘネップの『通過儀礼』が古典ですが、そこに「死と再生」を読み取るのは、エリアーデをはじめとする宗教学者や人類学者の著作に頻繁に見られます。

仏像には魂が入れられていて、展覧会で私たちが見るときなどは、抜かれている場合があるということでしたが、抜かれた魂は抜かれているあいだ、どこに行っていると考えられているのかと思いました。魂がなければ、ただの木石だととらえられるということは、魂が入っていないと認識された仏像は、魂が入るまでは拝む対象にはならないということだと思えますが、それって見る人が見たら入っているか入っていないか識別できるのでしょうか。

たいていの展覧会では、オープンの前に法要をして、魂を入れるようです。魂とは言わず「お精（しょう）」とか「お精根（しょうこん）」と言うようです（次の方のコメントも参照して下さい）。これは仏像の修理をするときや、仏壇を購入したり、あるいは廃棄するときにも行いますので、そういうことに関係する人にはよく知られた知識でしょう。抜かれた魂は仏の世界に行っていると考えるとわかりやすいのですが、仏というのはどこか特別な世界に住んでいる天人のような存在ではなく、われわれとは次元の異なる存在なので、空間移動をするというわけではないようです（私がいつも使うマンダラの図式は、誤解を生みますね）。仏に魂が入っているかいないかは、わかる人にはわかるようです。見てわかるという視覚的なものではなく、何かを感じるそうです。残念ながら私にはその能力がありませんが。

家を改築するとき、仏壇は一時的に移転しますが、その際にお手次の寺から僧に来てもらい、一度「お精（しょう）」を抜いてから移動し、移転先で「お精（しょう）」を入れてもらいます。新しい家が完成したときも、同じ手順で僧に来てもらいます。神棚の場合はとくに神職は呼ばず、戸主が手袋をして、移転先に運びます。家が完成した場合は、吉日を選び、神棚を選びますが、占いに凝り固まっている人で、完成前が吉日の場合、神棚を安置し、戸主は未完成の家に布団を敷き、一晩泊まっています。こんな人を当地方では「御幣かつぎ」と呼びます。完成式の流れにおいて、乳粥の儀式は釈迦が悟りを開き下山したとき、スジャータが捧げた飲み物にちなむものでしょうか。

仏壇の「お精入れ」や神棚の安置の情報、ありがとうございました。仏壇に関しては基本的には仏像の完成式と同じようです。仏壇は仏の世界を表すものですから、小さな寺院に相当します（浄土真宗の場合、さらに極楽浄土もイメージされています）。神棚に関する儀礼は日本固有のものという気がしますが、個人の家に神棚を置くようになったのは、おそらく明治以降なので、伝統としては比較的新しいものかもしれません。乳粥の儀式は、仏教の文献ではスジャータによる乳粥布施に関連づけられているようですが、もともとはヒンドゥー教のプラティシュターでおこなわれているものが、仏教でも踏襲されたようで、後から結び付けられたようです。なお、スジャータによる乳粥布施は、悟りを開いた後ではなく、苦行による修行の限界を知った釈迦が、苦行を放棄し、体力を回復させるために摂取したもので、悟りを開くのはその後です。

灌頂儀礼を受けた人が、その内容を漏らしてしまったらどうなるのでしょうか。そもそも、そういう人がいないと内容はわからないままですよね。それでも、自分以外の人の灌頂については話しても大丈夫なんですか。ウパナヤナのところで、「受胎後 8、11、12 年目」とありましたが、これは年齢の 8 歳、11 歳、12 歳とは別なのですか。よい言い方がわからないのですが、「十月十日で

産まれる」という言葉を用いるその十月十日も含めるといえるのでしょうか。

基本的には話してはいけないといっているの、話さないのでしょう。実際、灌頂儀礼の体験談のようなものは、私の知る限りでもほとんど発表されていません。他の人の灌頂についても同様です。儀礼に関与したものは、その儀礼について口外してはならないのがきまりです。ただし、古い文献を紹介することは問題ありませんし、実際、いくつも儀軌類が発表されています。過去においても、古い時代の儀礼を研究する僧侶が大勢いました。この分野のことを密教では「事相」（じそう）といいます。これに対して、教理的な研究は「教相」（きょうそう）といって、この両者を均等に学ぶことが、密教の僧侶のつとめとも言われます。ウパナヤナについては、わざわざ「受胎後」と言っているの、おそらく妊娠期間も含むのでしょう。日本で言うところのいわゆる「数え」の年齢かとも思います。

投華得仏はおもしろいと思いましたが、花がどこに落ちて真ん中に移動させるようになったことで、形式的なものになってしまったのではないかと感じました。花がおどろおどろしい仏の上に落ちた場合を考えると、そちらの方がよいのかもしれないが。

たしかに形式的ですが、空海の記事にならったと考えるならば、大師信仰のひとつのあらわれともとれます。投華得仏は灌頂の儀礼の中では謎のプロセスです。別にこれがなくても、灌頂の儀礼の流れは成立します。何か別の要素（それも仏教以外の）が混入したのではないかと考えています。なお、投華得仏は灌頂の中ではレベルが低いプロセスなので、結縁灌頂という在家者向けの灌頂でも行うことができます。私のいた高野山では、春の大型連休と秋の文化の日の頃に、2回、結縁灌頂が行われます。観光客でも気楽に受けられますので、関心がある人は一度受けてみて下さい（ただし、無料ではありません）。

仏塔は、それ自体が仏であるとのことでしたが、

仏の姿をした像を本当の仏にするのはわかるのですが、建物である仏塔を仏にするということに、疑問が残りました。仏塔は、高德の僧の遺骨を安置する場所だったと思うのですが、骨となり、形を無くしてしまった仏に、あらたな形を与えるためのものであるような気がしました。仏を安置する場所は、ただの建物ではなくて、神聖なものにする必要があるから、建物も仏にするということでしょうか。

仏塔や寺院のような建造物のプラティシクターは、これまでの授業で取り上げたさまざまなトピックとも関連します。ヴェーダの時代以来、儀礼の場はひとつの宇宙を示し、それが身体（とくに儀礼の祭官の身体）と重ねられました。これは、インドの伝統的な「小宇宙と大宇宙の相同」という考え方を具体的に表しています。小宇宙が身体、大宇宙が実際のコスモス、そして両者の媒介となるのが儀礼空間です。ヒンドゥー教の寺院が恒常的な祭祀空間であり、神の家、すなわちコスモスであることも紹介しましたが、ここでも寺院が身体であるという意識が強く働いています。建築儀礼において、大地の女神とバラモンとのあいだの聖婚によって、胎児である寺院が誕生するというプロセスにも言及しました。仏塔の場合、さらに仏教的な背景があります。もともと、仏塔とは涅槃に入った釈迦を荼毘に付して、その遺骨である舍利を祀るために建立されたものです。しかし、舍利とはもともと遺骨という意味ではなく、身体を表す言葉です（ただし、身体の中で骨格が意識されています）。この仏の身体を内に含む仏塔は、その後、無数に増え続けていきます。はじめの仏塔も分舍利の後、十基建立されますが、さらにアショーカ王の時代には八万四千に増やされ、その後も数多くの仏塔がアジア各地に建てられます。日本の奈良時代の百万塔陀羅尼の百万塔もその例です。これによって、仏教の教えである法が世界中に広がることを意図したのですが、その具体的な方法として、仏の身体を含む仏塔を増やし続けたのです（このあたりのことは私の『仏のイメージを読む』の第四章で詳しく述べています）。さらに密教では、五輪塔に見られるように、仏塔そ

のものが身体をかたどったと考えられています。五輪塔の五輪とは宇宙を構成する地水火風空の五大元素で、人間の身体もこの五つに還元されます。

これを立方体や球などの形で表した五輪塔は、そのまま、人間の体の形を表すと考えられました。

#### 10. 仏を生み出すテクニック：観想法・観仏

悟りには段階があるということが意外でした。あと、人間（小野小町さん）が腐っていくさまをスライドで見ましたが、あれは本当に全部小野小町さんを描いたものなのかと思いました。だとしたら、小野さんはあのような死に方をしたのか、それとも美人の象徴とも言える彼女でも、不浄の体を持つ人間であることを強調したかったのでしょうか。

インドのヨーガや瞑想では、悟りには段階があるのが基本です。釈迦が悟りを開いたときも、初禪から二禪、三禪、四禪と、順を追ってレベルがあがっていきました（悟りを深めたという見方もできます）。配付資料の『仏教要語の基礎知識』にも、このあたりの悟りの体系が簡単に説明されています。しかし、おそらくほとんどの日本人にとって、悟りとは「はっと気づく」とか「突然、何かの拍子で悟る」というイメージが強いと思います。これはインド的な悟りではありませんが、禪宗でしばしば説かれる悟りは、このタイプです。日本の禪宗は中国の禪に起源を持ちますが、そこでは大きく「頓悟」と「漸悟」というふたつの流れがありました。文字どおり、前者が「突然悟る」タイプで、後者が「順序立てて悟る」タイプです。もともとインド仏教の悟りは後者だったのですが、中国で前者が有力となり、日本の禪宗はそれを受け継いだのです。人間の不浄観を絵巻にした『九相詩絵巻』の方ですが、小野小町という説と、嵯峨天皇の後である檀林皇后という説のふたつが古くからあります。解釈については、コメントの最後にあげてくれている「美人の象徴とも言える彼女でも、不浄の体を持つ人間であることを強調したかった」というとおりですが、小野小町とるか、檀林皇后とるか、少し意味合い

が違うそうです。九相詩に描かれている腐乱死体は、有名な聖衆来迎寺の「六道絵」という絵にも含まれ、図像学的な研究も盛んに行われています。最近も以下のような研究が発表されています。

鷹巣 純 2007 「腐乱死体のイコノロジー—九相詩図像の周辺—」『説話文学研究』42: 125-132.

泉 武夫・加須屋誠・山本聡美 2007 『六道絵』中央公論美術出版（加須屋氏の解説）.

西山美香 2008 「九相図の展開 小野小町と檀林皇后の〈死の物語〉」『国文学 解釈と鑑賞』73(12): 120-127.

カルマンとカルマは違うものなのですか。日本語では「業」で同じに見えるのですが…。ヨーガが涅槃に至るための手段であることはわかりましたが、私たちが知っている「ヨガ」は、ヨーガの中に身体によいものがあるって、それをダイエットなどに転用しているということではないのでしょうか。どうもつながらなくて…。

カルマンもカルマも同じです。サンスクリットの正しい形（辞書の見出しに出る形）は「カルマン」なのですが、主格、単数では「カルマ」となるので、それをを用いることも多いのです。an で終わる名詞は、他にも「ブラフマン」（梵）とか「アートマン」（我）とか「ラージャン」（王）など、重要な単語が多くあります。ヨーガは基本的に瞑想や実践の手段であり、体操やダイエット法ではありませんが、身体技法を中心とするため、現代では一般にそのようにとらえられています。正しい姿勢、とくに坐り方と、呼吸法が基本にあるため、ヨーガ教室でもそのあたりをまず徹底してトレーニングするはずで、しかし、インドで修行した先生などは、きちんとその精神的背景も

勉強して教える人もいるでしょう。あまりそれが昂じると、宗教的な要素が強くなります。ちなみに、オウム真理教も本来はそのような瞑想やヨーガを基本とする宗教団体だったはずで

**瞑想は他人からしたら何を考えているのかわからなく、本人の世界のみの行為ととらえてしまいがちだが、ちゃんとした儀礼のひとつであるとわかりました。他を遮断して、煩悩を捨てるというイメージがある。これはけっこう難解なことなのではないかと思いました。**

瞑想をそのまま儀礼とみなすのは少し無理がありますが、インド世界の儀礼を考えるためには、瞑想のような個人的な宗教実践を知る必要があると思います。以前に取り上げた灌頂で、阿闍梨が仏の振る舞いをしたり、弟子に仏のエッセンスのようなものを与えるときには、必ずこのようなヨーガや瞑想がはじめにあります。頭の中だけで、自分自身が仏であると考えているのではなく、身体感覚として、仏と一体になっていることが前提となるからです。今回の授業では、それとは別の方向で、観想法や成就法のような個人的な宗教体験が、集団による儀礼の場で共有される事例を紹介します。集団的な儀礼と個人的な宗教実践が、さまざまな形で絡み合っているのです。コメントの最後にある「煩悩を捨てる」のはもちろんたいへんで難解なのですが、儀礼はそのようなレベルとは別のところで作用するので、煩悩の有無にかかわらず、実践されなければなりません。

**エリアーデの小説、読んでみたくなりました。絵巻は実際に死体を観察して描いたのでしょうか…。リアルで驚きました。観仏三昧では往復することが重要なのですか。同じ行為を同じ順番で繰り返すことよりも、仏の肩や足元から出るのは、水や火だけなのですか。**

エリアーデの小説は日本語で読めるものがいくつかあります。私が持っているのは以下の文庫本です（持っているだけで未読です）。

エリアーデ、ミルチャ 1990 『ホーニヒベルガー博士の秘密』直野敦・住谷春也訳 福武書店。

ほかにも『マイトレイ』というのが代表作として知られていて、作品社から刊行されています（金大にはないようで、私も持っていません）。エリアーデは若いころ、インドに長期間滞在し、有名なインド哲学者のダスグプタの家に住んでいたのですが、その娘であるマイトレイ（小説のタイトルにもなっています）と恋仲になり云々というさまざまな逸話もあります。観仏三昧の瞑想の順序は、おそらく往復することが重要だったのでしょう。反復でもあるのですが、一種の循環的な瞑想だと思います。多くの仏とひとりの仏を交互に瞑想するというのもありましたが、これも往復というか、循環的な瞑想法です。この流れをくむ瞑想法が密教にもあり、広観と斂観といいます。瞑想の対象を宇宙大に広げたり、鼻の先に置いた芥子粒にまで小さくしたりという往復運動です。仏から火と水が出るのは、これまでの儀礼でも取り上げたように、インドの物質の中でこのふたつが特別な存在だからでしょう。エネルギーや生命力の具現化したものが火と水であり、それをコントロールするところに、仏陀の超越性や万能であることが見られます。

**仏の三十二相では、宗教的な理想が現れていると書いてある。29の真青眼だが、古来より、「青」はあまりよい色ではなかったと「青の歴史学」というタイトル（…だったと思う）の本に書いてある。実際、1800年以降に人気の色になるまでは不吉な色であつたらしい。宗教、仏教美術史の中でそうした色がなぜ使われたのだろう。**

青い眼が仏像の三十二相に含まれていることは、授業でも紹介したように、実際にそのような身体的な特徴を持った人びとがいたことが背景にあるのでしょうか。ほとんどの人が青い眼であれば、それが不吉とかは問題にならないと思います。青が不吉な色というのは、ヨーロッパの一般的な色彩感覚ではないでしょうか。インドでは青がとくに不吉ということはないようです。青い色の睡蓮が仏の持物などにもしばしば登場します。文学作品では美人の比喩にも用いられます。ただ、青といっても水色から紺色までさまざまな青があります。

このうち、濃い青は不吉というわけではありませんが、力強さや激しさなどと結びつくイメージだったようです。古くはリグ・ヴェーダの中のインドラへの讃歌に、「黒雲のような青黒いインドラ」という一節が現れます。一方、中央アジアや西アジアでは、ラピスラズリの青い色が高貴なイメージと結びついています。中央アジアの有名な仏教石窟のひとつキジルでは、青がしばしば背景に描かれますが、それも青の持つ高貴さからくるようです。

高校の時に「ヨーガ」とは「苦行」を意味し、自らの肉体を痛めつけたりすることで、人間的な感情や肉体から離れ、仏に近付くための儀式だと聞いたことがあります。ヨガの柔軟体操もその名残が運動に取り入れられたものと聞いたのですが、あくまでもヨーガの一流派なのでしょうか。

残念ながら、高校の時の先生のお話は、ヨーガと苦行（タパス）を混同、もしくは取り違えていらっしゃるようです（ひょっとすると、キリスト教の苦行も入っているかもしれません）。タパスの中にヨーガと共通する坐法や修行法が含まれることはありますが、両者は基本的に別の実践です。ヨーガの定義にある「心の働きの制御」というのは、苦行によって自らに過酷な苦痛を与えることとは、むしろ正反対です。ヨーガが柔軟体操のように見えるのは、特定の身体のポーズが、そのような「心の働きの制御」に効果的であるためです。もちろん、体の硬い人（私もそうですが）にとって、無理な柔軟体操は苦痛でしかありませんが、その場合もオーソドックスなヨーガであれば、けっして無理には体を曲げたりはしません。ヨーガの中で独得な一派としては、中世のインドで流行した「ハタヨーガ」というのがあります。古典的なヨーガと異なり、体の中のエネルギーを活性化

させるという方法をとります。これも、「心の働きを制御する」ヨーガとは逆の方向をめざしますが、広く受け入れられ、とくに密教を含むタントリズムでは、ハタヨーガに似た実践がしばしば行われました。現在の日本で行われているヨーガも、このハタヨーガに含まれるものが多いようです。

仏の三十二相は能の詞章中によく出てきます。具体的にどんなものなのか知らなかったのが、知れてよかったです。指のあいだに膜があるなど、知っているものもありましたが…。三十二相は不動の十九相観みたいだなと思いました。不動の場合は感得してその姿を描かせたといわれていますが、観仏の場合はどうなのでしょう。あと、十九より三十二は数が多くて観像はたいへんそうです。

能を理解するためには、いろいろな仏教の知識が必要なのですね。ぜひ、この授業も役立ててください。三十二相は数が重要だったようで、その内容は文献によって一部が異なります。三十二というのは二の五乗という整った数なので、好まれたのでしょうか。不動の十九相観は、水曜の仏教文化論で取り上げましたが、観想法の特殊なものです。十九という数もめずらしく、観想法にしばしば見られる身体の16の箇所への文字の布置をベースに、頭の部分の三つの特徴を加えたものと考えています。感得像は、十九相観や弘法大師様（よう）のオーソドックスな不動のイメージとは微妙に異なることからそう呼ばれます。そのために、「画像として残す」ことが重要視されたのです。三十二相の場合、実際の仏像を参考にして、観仏を行ったり、あるいは、三十二相を直接表現するために、仏像が作られたりしたケースが考えられます。いずれにしても、仏の像をつくることと仏を瞑想することは、三十二相でも感得像でも、密接な関係があります。

## 11. 見ることによる救い：念仏・臨終行儀・迎講

「仏を見るのが臨終行儀の一環」というのは何となく理解できました。しかし、その臨終行儀と、僧たちがふだん行っている修行とは、何が違うんでしょうか。もしくは臨終行儀は修行として考えない方がいいのですか。

前回の授業はその前の授業とひと続きになっています。はじめの回は個人的な瞑想をおもなテーマにしていました。これは、それまで見てきたヴェーダの祭式や密教儀礼とは異なり、一般には「儀礼」の範疇には含まれないテーマです。しかし、私の扱う儀礼研究では、このような個人的な宗教実践が、しばしば集団的な儀礼とクロスします。そのひとつ目の例が、成就法や観想法と呼ばれるもので、本来、行者が仏を瞑想することを基本としていましたが、その中に、灌頂儀礼が組み込まれているというのがポイントでした。今回はこの流れを受けて、個人的な瞑想であった「仏を見ること」が、臨終における重要なプロセスとして位置づけられ、それが、二十五三昧講のような集団で共有され、さらに迎講としてパフォーマンスとなったことを概観しました。臨終行儀の「行儀」とは、まさに儀礼のことなので、そこですでに修行は儀礼化していると思います。迎講はこの臨終行儀を年中行事にしている点で、修行の意味はほとんど失われています。むしろ、この儀礼を成立させているのは、寺院とそれをささえるさまざまな人びとという社会的な集団でしょう。

仏の智慧も具体的な形を持つものとされてきましたが、成就法の中で智慧となるものは、出てきていたのでしょうか。智薩埵がその象徴でしょうか。そうだと思います。智薩埵と三昧耶薩埵というのは、わかりにくい考え方なのですが、密教の成就法にしばしば登場し、密教の瞑想を取り上げる研究者のあいだでは、その重要性がかねてより指摘されてきました。智薩埵は仏の智慧そのものがイメージをとって現れたもののようです。そのため、

単なる「たましい」のようなものではありません。「仏作って魂入れず」ということわざにある「魂」の場合、なにか「靈魂」のようなものを注入するイメージがあるのですが、そうではないのです。授業では紹介しませんでした。この智薩埵が成就法に登場する背景には、『金剛頂経』という経典に登場する「五相成身観」という瞑想法があるようです。詳細には立ち入りませんが、ここでは「法身毘盧遮那」という仏の智慧そのものが現れ、それが宇宙に遍満すると説かれます。そして、それは宇宙にいる無数の仏たち（大乘仏教以降はこのような多仏を前提とします）の心に「菩提心」として住すると説かれます。五相成身観では、一切義成就菩薩という菩薩が、瞑想の結果、この無数の仏たちの仲間入りを果たしますが、その瞬間、すべての無数の仏たちは一切義成就菩薩の心にある菩提心に帰入します。一個の存在であった一切義成就菩薩が、宇宙全体の仏たちとひとつになるのですが、それは宇宙が消えてしまうのではなく、宇宙そのものと等しいものになることを示しています。密教の悟りとは、そのようなものなのです。詳しくは私の『仏のイメージを読む』の第四章をお読み下さい。

當麻寺の迎講の写真にはすごく驚きました。あのような儀式が行われることはまったく知らなかったもので、お面がのっぺりしていて、少しこわかったですけど。しかし、中将姫の像はあらかじめ移動させておくのではなく、儀式の中できちんとみこしに乗って移動させられるんですね。それって、この迎講の意味（来迎と成仏？）とは矛盾しないんでしょうか。それとも、これは来迎の「再現」だから矛盾しないのでしょうか。

迎講の儀式の様子は、ほんとうに驚きのパフォーマンスです。日本の仏教の法会にこんなものがあるなんて、というのがおおかたの人の感想でしょう。私はこれまでも本や論文で當麻寺の迎講のこと

は何度も取り上げてきたのですが、実際に見ることができたのは今年（2008年）の5月が初めてでした。他の人の報告や紹介で知っていたつもりでしたが、やはり、本物をきちんと見なければわからないこともたくさんありました。たとえば、「練供養」というくらいなので、二十五菩薩がそれぞれゆっくり「お練り」をするのだと思っていたのですが、実際は観音と勢至の二菩薩のみが、合掌したり、蓮台を掲げたりして、パフォーマンスをしながらゆったり進んでいくのですが、それ以外の菩薩衆は、おつきの人に付き添われ、とことこと歩いていくだけでした。中将姫の移動もこのときにはじめて知りました。たしかに來迎や成仏とは矛盾するようですが、本来は準備の段階に相当する娑婆堂への移動も、儀式の一部に組み込まれてしまっていると考えればいいのではないのでしょうか。なお、迎講はかつては日本中の各地のお寺で行われていたようで、石川県にも能登地方に迎講のお面が残っています。お面を付けるというのは、非日常的な世界を出現させる典型的な方法です。

「チベットの死者の書」についてのプリントにも「存在そのものの中有」のところに、來迎と思われる記述があったが、その点は死者自身が視覚的に仏を見ることを強調している。仏教的な行いの中には、観仏など、仏を見るのが重要であったが、來迎というものを実際に見ることは、迎講などによって多くの人が共有できるようになるとともに、本来、死後に見るべきものであったものの性質が変わってしまう気がする。

「チベットの死者の書」の資料を配付したのは、仏を見ることによる救いが、日本の浄土教だけではなく、チベットにもあることで、一種の普遍性を知ってもらいたかったからです。「チベットの死者の書」の場合、浄土教とは関係がないようなのですが、私はどこかでつながっているのではないかと考えています。チベットでも阿弥陀や極楽への信仰はありますし、密教も浄土教も、インドの観仏や見仏の伝統を受け継いでいるからです。個人的な臨終行儀が、迎講という儀式に変わるこ

とで、その性質がまったく変わってしまったというのは、そのとおりだと思いますし、それこそが授業のポイントです。「儀礼化」「祭礼化」とは、形式化であり、形骸化でもあります。はじめのころに紹介したように、儀礼とはしばしば形式主義に陥り、実質的な意味を失ったり、変質させたりしますが、それが個人的な実践にも適用されるのです。

ふと思ったのですが、極楽を想像するよりも、地獄を想像する方が楽しいような気がしました。たしかに極楽浄土へ行く方がよいと思うんですが、想像するだけなら、地獄でのあんなことやこんなことを考えて、勝手に怖がっていた方が気を引き締めて生活を送れそうな気がします。

私もそう思いますし、過去の人たちもそうだったのでしょう。極楽浄土図というのは中央アジアで生まれ、中国、日本へと伝わりましたが、全体は極楽浄土の宮殿の中に、阿弥陀如来とその取り巻きが描かれているだけで、おもしろくありません。

「極楽浄土は三日もいれば退屈してしまう」と、誰かが言っていたと思いますが、美術でもそのとおりです。その点、地獄図は多様な情景を描いていますし、それ以上に、「こわいもの見たさ」を充足させる魅力を持っています。絵解きの題材として、日本各地に地獄図を所蔵する寺院はたくさんありますし、立山曼荼羅のように、他の絵画の中に組み込まれることもしばしば見られます。僧侶の説明を聞きながらこれを見ることが重要だったのです。ちなみに、浄土図の方は、浄土図に加えて、『観経』の物語や十六観を周りに並べた當麻曼荼羅の形式が、すでに中国から見られますし、さらに日本では九品往生の場面を取り出した來迎図が独立して描かれることが好まれるようになります。迎講はそれをさらに現実の世界に再現したことになります。

來迎引接ということで、極楽へ往生するための儀礼が、臨終行儀ということですが、この臨終行儀は日本特有のものなのでしょうか。インドで生まれた仏教から見ると、日本へ伝わってきた（とい

うか日本で成立した) 仏教は、異端というか、別物に見えます。

臨終行儀は日本特有ですね。中国の浄土教は日本の浄土教とかなり性格が異なり、本来の意味での観仏を重視します。プロの行者による高度な瞑想法というのが、その基本でしょう。日本仏教で来迎のような考え方が主流になったのは、天台における本覚思想という考え方かなり依拠しています。これは、人間は本来、仏と同じで悟った存在であり、それに気がつきさえすれば、誰でもすぐに悟ることができるという考え方です(かなり乱暴な説明ですが)。このような考え方は、インドでも「如来蔵思想」という名で、すでに存在したのですが、インド大乘仏教では正統とはみなされず、むしろ危険な思想と考えられてきました。これを推し進めると「修行無用論」になってしまうからです。しかし、日本ではむしろ主流となりました。日本仏教がインド仏教から見れば異端であるというのはそのとおりです。しかし、それも「仏教」の名のもとで人びとに信仰されたのであれば、それを「特別な仏教」とみなすよりも、それをも包摂して「仏教」というものが歴史的に存在したとみなす方が生産的ですし、おもしろいのではないのでしょうか。

『往生要集』はもっと思想についてばかりを述べたものだと思っていたので、「地獄観」や「臨終の行儀」についても言及していると知って、興味を引かれました。同時に「起請八箇条」などもたいへんおもしろい資料だと感じました。今となつては、病院などで看取られながら臨終を迎えるというイメージばかりで、特別、何かをするということはないと思います。しかし、昔はこのようにして臨終についての規定をし、そのための行儀もあったと知り、感心しました。ひとつ気になったこととして、これは庶民にも伝わっていたのかどうかというものがあります。このような臨終行儀は、どの身分のものにとっても一般的だったのでしょうか。

『往生要集』はよく知られた仏教文献ですが、全編を通読した人は少ないでしょう(私も実はして

いません)。機会があれば、読んでみて下さい。源信の持っていた世界観や救済の論理がわかるはずですが。臨終行儀やそれを支えた二十五三昧講などは、近年、死をめぐる議論の中で再評価されています。一種のホスピスなのです。「看取り」ということばもしばしば登場します。庶民もしていたかどうかは、明確な答えを持っていませんが、平安時代ではまだ庶民一般に浸透していなかったという印象を持っています。二十五三昧講も貴族や高僧のエリート集団ですし、そもそも浄土教が人びとに浸透するのは、鎌倉以降です(空也などの例外はありましたが)。鎌倉時代に成立した『法然上人絵伝』には、さまざまな人たちが来迎を体験したり、臨終行儀を行っている姿が見られますが、それでも僧侶以外の庶民のケースはまれです。来迎の場面としては芥川龍之介の「三の宮の姫君」が有名ですが、主人公の姫君も落ちぶれてはいても貴族の家柄です。